新秋特別興行

文樂座 人形淨瑠璃

文樂座

四つ橋

一部 金十五錢

新秋九月。まづ皆様の御健康を祝福いたします。爽涼の氣充ち滿ちて精興一段と華々しき折柄夏の興行に於て空前の好成績を擧げ得ました當文樂座人形淨瑠璃はこの新秋陣を皆様の興味本位に依りその待望に應へることゝ致しました。茲に名狂言を竝べ若手連に、巨頭を据へ爽秋九月興行の絶体精鋭軍として鄕土藝術の饗宴を展くもの淨瑠璃の大阪人としての皆様の御聲援を俟つ次第で御座ゐます

昭和五年九月一日

四ツ橋

文樂座

昭和五年九月一日初日

初　日　午後三時　開幕
二日目より　午後四時　開幕

二日目よりの

・御觀覽料・

一等お座席　御一名——金三圓
一等椅子席　御一名——金二圓五十錢
二等席　御一名——金一圓
三等席　御一名——金五十錢

一等お座席
一等椅子席は五日前より

前賣切符發賣致居候

前賣切符専用電話　南四七一一番
電話南　七四〇八番　三七八八番

お草履の準備は御座ゐますが、靴、草履はそのまゝ御入場出來ますからなるべく靴、草履でお越しを願ひます。

本誌へカツトツ廣告御掲載希望の向は文樂座編輯部へ希ます

あらゆる印刷

永井日英堂印刷所

大阪市西區土佐堀通一丁目

長三八〇三番
四九四〇番
四九四一番

(44) 土佐堀

文楽座

人形浄瑠璃芝居

太夫 [illegible]

前 八陣守護城

[illegible]

中 [illegible]

八幡里 引窓の段

次 三十三所[illegible]壺坂寺

[illegible]

切 [illegible]

新版 のゝ[illegible]

三味線

[illegible]

文樂座人形淨瑠璃

九月興行 二日目よりの 豫定時間割

前 八陣守護城

須花入江の段（午後四時開幕の豫定）
御休憩時間 幕間約十分間の豫定
主計之助早打の段（四時四十分開幕の豫定）
正清本城の段（五時十分開幕の豫定）
御食事時間 幕間約二十分間の豫定

中 双蝶々曲輪日記

八幡里引窓の段（六時四十分開幕の豫定）
御食事時間 幕間約二十分間の豫定

次 三十三所壺坂寺

澤市内の段（八時十分開幕の豫定）
御休憩時間 幕間約十分間の豫定

切 戀飛脚大和往來

新口村の段（九時二十分開幕の豫定）
（打出し十時二十五分の豫定）

（舞臺裝置 松田種次）

二代目義太夫の鴻業

二十四歳で櫓下となる

土を耕し、種を蒔き、三十餘年の永の間、毎日でしほにかけて育てゝ來た、義太夫節がやう〳〵に綠の葉を出し、末の繁茂を見せやうとしてゐる時、惜しいかな主の義太夫は死んでしまつた。もしもこの若樹を、このまゝ捨てゝ置いたら、云ふまでもなく、そのまゝ枯れ果てゝ了ふであらうが、天義太夫の誠意を嘉納まし〳〵、美ごとな後繼者を義太夫にくだされた。

話はすこしもどへ遡る。正德四年九月十日、一座が杖とも柱とも頼む義太夫に先立たれた、多くの門弟や竹本座の連中は、悲痛哀傷のうちにも氣にかゝるは、明日からの竹本座の運命である、さうして更に適切な問題は、義太夫に代るべき櫓下の名前主である、これは一日も怠に出來ぬことだつた。いつたい誰れになるだらう、とかうお互ひには云つてゐるものゝ、そこは人間の淺間しさ、高弟達の中では、内々肚づもりで此名譽を荷べきもの、先づ俺れを措いて他にはなからう我が我がと取らぬ狸の皮算用をしてゐるものも無いではなかつた。けれどもこれは好都合に、さすがの偉人義太夫ほどの人だ、ちやんと自分で後繼者を選んで遺言狀を作つて置いたから、先づは醜い爭ひなどは起さないで、直ちに決定をする問題になつてゐた。ところが開いて見ると意外とも意外、多くの門弟達はあつと驚いて呆然自失してしまつた。これは門弟達の驚きに無理はない。我が身の上にふりかゝる大問題だ、傍で聞いてゐたその座の關係者達さへ容易に信ぜられないで己の耳を疑つたのだ。ところが遺書には判然と、門人和哥竹政太夫の名が認められてゐる。故參の門弟には相當の年輩で、既に一家を爲してゐる人さへある、

俺れが俺れがと内々鎬を削つてゐた連中は、驚きよりも一層、なんだ馬鹿々々しいと、寧ろ腹を立てゝゐる手合ひも中にはあつた。逆恨みながら義太夫の肚のうちをさへ疑つたものもある。それもその筈、政太夫は新參も新參、遙かどん尻に控へてゐるまだ二十四歳の青二才であつたのだ。だが恨んだつて憤つたつて、追つくわけのものではない、嚴然たる先師が遺言であるどこか見どころがあつての上に違ひない、もとより悟りきれない連中は、いつまでも、ぐず〳〵と云つてゐたが、幸ひにも先師の友人として、物の解つた準後見格の近松門左衛門がこのごた〳〵を圓滿に鎭めてしまつて、幸ひに事なく濟むには濟むだのだが、さて若輩の政太夫が、義太夫節の總旗頭、竹本座の統領、名譽ある櫓下に納まつて、果してその責任を盡はるや否や世間注視の問題に移つて行つた。

この晴がましい位置に据られた政太夫、先師の遺訓を身にしめて、大覺悟をもつて臨んだにはちがひないが、悲しいかな、さう一時に信用は繫がれない。二三興行は殆んど成績不良、おまけに、不平黨の旗頭大和太夫などは二三の連中を引連れてサツサと退座して行くといふ心細さである。何んとかしなければ竹本座ももう此のまゝ亡びてしまふのではないかと思われるやうな狀態になつて來た。義太夫歿後 座の後見格になつてゐる近松は、己が執りなした政太夫を此際なんとか救はねばならないと、それは〳〵日夜苦心慘憺してとう〳〵『國性父合戰』を書き卸した。奇拔な趣向と舞臺面の變化と例の妙筆とでおもしろく出來てゐる上に、政太夫が決死的努力で遂にこれを大成して、一度に人氣を取り返し、古往今來類を見ぬ劇壇に於ける大記錄を作つて、三年越し十七ケ月に亘る連續興行をしたといふのだから凄じい。かうなると次第に調子がついてくる上に、脫退をした者も歸つてくる、政太夫の名聲は日に〳〵高まつて行つて、はじめて義太夫の睨んだ眼に狂ひが無かつたことがわかつて來た。

異數の拔擢と、門左衛門の愛撫によつて、嶄然頭角を現はして來た政太夫はもとより凡人ではない。暫く彼の閲歷を見てみる。

元祿四年、大阪嶋の内三ツ寺に生る。藤姓水原氏、字播磨屋長右衛門、幼名長四郎、諱は喜敎、又は文正翁。家は中紅家と云つて資産家であつたらしい。幼少

から淨瑠璃を好んで、素人天狗の仲間でも、頭拔けた天才であつた。やがて長四郎は斯道の誰れもが羨んでゐる、見識のある太夫になりたいものと志を立てゝ、義太夫の門に入つた。彼れはその後熱心に稽古を勵んで、早く舞臺へ立ちたいといふ望みを起し、師匠にそのことを賴んだが、なか〳〵それは許されなかつたのである。といふのは、當時は演し物が五幕あるとすれば、その五幕ともに切場は楷下が勤め、端場を他の太夫が勤めるといふ習慣だつたから、芝居出勤と云ふことになるとなか〳〵後輩にお鉢が廻つて來ない、それにもう一つ太夫としての當時の重要條件が、音吐朗々たる大聲か、或は艶麗玉の如き美音家で無くてはならなかつた。ところが不幸にして彼長四郎には、そのどちらの一つも備はつてゐないのである。美ごと落第した。ところが本人なか〳〵諦められない。すぐ隣の東の芝居に楷を上げてゐる豐竹座の方へ行つて、そこの舞臺へ上げて貰ふことになつた、勿論師匠の許可を得てゐた。この時寶永七年、彼二十歳である、それからやがて京都へ移り、また大阪に戻つて、こんどは曾根崎の芝居へ出たりしてゐた。その二年間の彼はウンと腕を磨いて、天才の閃きがおい〳〵濃厚にあらはれ始めて來てゐた。そこへ思ひがけなく先師義太夫から、竹本座へ出勤せよといふ吉報が齎らされたのである、彼れは始めて己れの素志が貫徹したことを悅んだ。義太夫の思はくでは、現在はともかく、これから先の義太夫節は、どうも今までのやうな聲ばかりでは不可ない、義太夫節百年の大計はやはり藝の內面にある、ところが最近政太夫を聞いて驚いた。彼は聲はないが、その無い聲で、人情の微を穿つた語りぶりが、チラ〳〵と義太夫の思ふ圖に當つてくる。こゝに義太夫の想像してゐる、聲よりも腹で語る、といふ新らしい天地が仄かに見えるやうな氣がした。で、とりあへず我が手元へ呼び返していろ〳〵と薫陶をして見た、ところがその鋒鋩が次第に現はれてくるので義太夫は非常に滿足した。正德二年三月といふから、義太夫の死ぬ二年七ケ月前のこと、竹本座では『丹波與作』が出て、政太夫に道中双六の場をお目見得に語らせたのであるが大方のものは情味の豊かな語りぶりに舌を卷いたそうだ。そんなわけで、義太夫は、とう〳〵多くの門人の中から政太夫を後繼者に拔選したのであつた。果せる

かな、この政太夫が、大物も大物、素晴らしい名人になり、義太夫節をして遂に千年の長命者に育て上げ、師匠ではまだ完成しなかつた。近松の世話物を思ひの盡に語りわけて偉業に於ては、とても匹敵する者がない。

それは一つは近松の子を見るやうな慈愛に哺くまれ政太夫がまた祖父に盡すやうなまこと、があつたればこそ（實際に於ても近松が六十三歳、政太夫二十五歳）かういふ美しい實を結んだわけだが『天網嶋』『女殺油地獄』『宵庚申』『國性爺』『會稽山』『關八州繋馬』かういふ代表的名作はみな政太夫によつて完成されたのである。而かも彼の優れた點はその技藝ばかりではなく、實にその珠の如き人格にある。當時の儒者であり近松半二の親であつた穂積以貴はかう評してゐる。

木訥自ら守り、華美粉飾を避け、邊幅を飾らなかつたから一見尨々として野人の如し、これは藝人としては珍しい事で、後年その德を慕ふて門に集まる者多く門人の如き、式太夫、佐太夫、包太夫、七太夫、志摩太夫、紋太夫、百合太夫、政太夫（二世）西太夫、を重なるものとして數へ切れないほどである。そんなわけで、享保十九年二月。楢下となつて二十年目に、他から薦められて、二世竹本義太夫を襲名した、もつとも早くからさういふ推薦を受けてはゐたが、遺がに先輩に遠慮をして延び延びになつてゐたといふことである、翌二十年十一月上總少掾を受領。元文三年再び勅許になつて、播磨少掾となつた。その一月祝儀興行として、近松の『天神記』の栢榴天神の條を改作して、一曲物『菅相丞冥加松梅』を出語りで勤めて大好評を取り。かういふ逸話をのこした。それは、門人の脇田氏こと竹本喜太夫が長崎逗留中、師傳のまゝを、清國人の姑蘇の沈草亭及び吳志明といふ人に聽かせたところが、非常に感銘してその全文を寫しとつて故國へ持つて歸り、改めて故國から、播磨掾へと石印二個を贈つて來た。またこの勅許受領の舞臺で使用したといふ播磨掾の正本は（表紙藝題から朱章悉く肉筆のもの）現存の義太夫節朱章入正本としては恐らく最古のものであらう、これは私が正しい傳來によつて襲藏してゐる。

劇壇破天荒の大當りをとつた『國性爺合戰』が、たゞにその時かぎりの一時の人氣ではなく後末どれほど

大きな影響を受けたかといふことは記錄する必要がある。政太夫自身としてもその初興行の三年目、享保五年正月、同十六年五月、寛延三年六月の三回の外にも度々上演してゐるが、この作から、五年後に出來た『天綱嶋』にも、第一段河床の門口へやつてくるてんがう念佛に、九仙山の文句を取り入れて、

樊噲流は珍らしからず、門を破るは日本の朝比奈……

それ惜いて國性爺の道行念佛が所望ぢや……

或ひは太兵衛の綽名を、李蹈天と呼ばせてゐるなどなか〳〵國性爺氣分が去らない。尙又享保二年に同じ近松が『國性爺後日合戰』を同七年に『唐船噺今國性爺』を書いて居り。敵方の豊竹座でも、紀海音が『傾城國性爺』を出し。錦文流の方でも又『國仙野手柄日記』といふ文彌節の正本を出した。

さて又歌舞伎の方では、享保元年の秋京の『京萬太夫座』で、榊山小四郎（和藤内）芳澤あやめ（母親）紫崎林左衛かもん（錦祥女）を上演したのを始め、翌二年には道頓堀の竹嶋幸左衛門、櫻山四郎三郎、姉川新四郎の三座で競爭興行を始め、竹嶋が優勝してゐる從つて、それが江戸へ飛火して東西双方國性爺流行の火の手は益々熾んになり、殆ど日本國中國性爺で一ぱいになつた門（甘輝）山本形だ。その影響はやがてまた讀本、草紙、謠曲、繪畫、玩具、人形、菓子、衣裳なんでもかんでも國性爺でなくては納まらなかつた。

かくて義太夫節大成の鴻業を爲し遂げた竹本播磨少掾は、延享元年三月、竹田出雲、三好松洛等合作『兒源氏道中日記』の上演中病を得て遂に七月二十五日、行年五十四歳を以て長逝した。舞臺生活三十五年、語り物九十三番を數ふ。

木谷蓬吟著
文樂座今昔譚より

前八陣守護城

浪花入江の段
主計之助早打の段
正清本城の段

この淨瑠璃は『厭蝕太平記』によつて加藤清正を中心とする豊臣家の没落を書いたもので家康の爲に清正が毒殺された條りであります。せかいを北條にもつてゐつて主要人物は凡て別名で表はされてゐます。仍ち森三左衛門は池田三左衛門、兒島政次は後藤又兵衛、佐々木高綱は眞田幸村、大内は島津、主計之助清郷は加藤忠廣、時政は家康、お通の方は淀君に當てゝ御座ゐます。正清は小田の幼君を抱いて孤忠を盡しますが近江琵琶湖に幼君と正清の乘つた御座船顚覆の危難も辛うじて免れますが遂に二條城の饗應に時政公の爲に毒酒を盛られます。毒酒とは知つたが飲まれば違勅の科、森三左衛門が毒盃を取つて犧牲になつた義心に感じ盃を取つたのでありました。命數を知つた正清は肥後の本城に引籠り夕陽こゝもに沈む主家の運命を嘶ちます。一子主計之助の新妻雛絹は森三左衛門の娘さて離緣され夫に操を立てゝ自害して果てます。兒島政次佐々木高綱の兩軍師を味方に得た正清は安堵の中に瞑目し、兩軍師は幼君を擁して大内氏に據るといふ筋になつてゐます。

浪花入江の段

正清　竹本長尾太夫
雛絹　竹本源路太夫
鞠川　竹本陸路太夫
早淵　竹本播路太夫
琴　竹本亀久太夫

（竹本鏡太夫）
（竹本文太夫）
（竹本辰太夫）
（竹本龜久太夫）
（豊澤猿太郎）
（豊澤團二郎）
（豊澤新之助）

（床本）浪花入江の段

歸國を祝ふ棹の調聲賑はしき召の舟忠と戀とを一葉の風に任する涙の上

人形

加藤正清　吉田榮三
嫁雛絹　桐竹紋十郎
早淵久馬　吉田文之助
鞠川玄蕃　吉田玉市

主計之助早打の段

豊竹つばめ太夫
野澤勝市

人形

大内義弘　桐竹門造
鞠川玄蕃　吉田玉市
妻葉末　吉田小兵吉
船頭灘右衛門　吉田玉松
加藤主計之助　吉田玉幸

琴柱に通ふ鴈金も涙花の春をや見捨行く時に後より艘一艘艫拍子揃へて漕付漕寄加藤氏御見送りとして北條の使者早淵久馬御對顔下されと舳板に手をつき述ければ、正清快然と障子ひらかせ先例違へず厚志の御使異儀なく歸國仕るとよきに言上いたしてくりやれ太儀〳〵といふ顔色ハテめんよふな正清公御氣分惡ふはござらぬか、アイヤ打晴たる遠見に心も一入長閑な海面、ハテめんよふな實正氣持は能ござるか、ハテ異な事に念が入堅固と言がふしぎなか、アイヤ〳〵〳〵御機嫌よくて主人も滿足もはやお暇〳〵と船子に目くばせそこ〳〵に船を廻して漕戻す雛絹おかしさ押包み申父上折角來ながら御口上も申上ず奮相な使者でござりませぬか何さ〳〵内意を請て來りしならん捨置て今一曲サ所望〳〵と打くつろぎ四方に嘯く逍遙の、詠を琴の緒に寄て涙花入江の身は捨小舟沈む思ひは我獨それはへ今朝の別れに袖引きとめよ宵の情に醉浮れ河内通ひの生駒山其高雄の若楓見んと斗に契りつゝ焚殘したる薄雲や伽羅の煙りの薫るはしんぞ思はゞ薫るはしんぞ思はゞじや、ムゝ水碧に砂子明らかなる兩岸の苔、娘が爪音歸鴈も返つて飛來るべき浦の景色アゝ面白し〳〵と見やる涙間をエイサツサ〳〵さつと漣み矢を射る如くおし切〳〵追くる早船北條の近臣鞠川玄蕃常にかはつて禮讓厚く正清殿御出帆の名殘を惜む再度の使者此一箱に餞別の御心を込られたり歸着の砌開封

正清本城の段

切　竹本大隅太夫
　　鶴澤道八

人形

加藤主計之助　吉田玉幸
嫁雛絹　桐竹紋十郎
妻楽末　吉田小兵吉
加藤正清　吉田榮三
鞠川玄蕃　吉田玉市
後室柵　吉田玉七
船頭灘右衛門
實ハ後藤元兵衛　吉田玉松
大内義弘　桐竹門造

有詞裏釘浦島がなみ〳〵ならぬ玉手箱加藤が船へ舁乘れば、ムヽ御懇志の御使者珍味佳肴は有られども一献汲んイザ是へと何氣なき体つく〳〵見てハテめんよふな同じ銚子の大盃三左衛門が有様とは、ナニ三左衛門にはいかゞ言れた、アイヤ物でござる森氏には下戸と見へます先刻の酒に餘程の酩酊それに引かへ正清殿また一献とは大丈夫併追付イヤサ目出度御歸國君にも嘸やお待兼おさらばさらばと夕浪路漕行船を漕戻す、ムヽ初の使者は先格の通り再び來る鞠川が前後揃はぬ詞の端々スリヤ三左衛門にはヱヽ父上のお身の上に、アイヤさして案ずる事ではない、舅御様どふやらあなたのお顔持、アヽコリヤ、船子共清めの船歌〳〵ムヽハヽ、ムヽハヽヽヽヽヽ。

（床本）主計之助早打の段

玉泉山に神を現はす關氏の義名我日本に髣髴たる加藤正清歸國の後心願有と引籠り百日の齋戒もけふ滿願の日に當れど奥方始め一家中對面さへも夏過て秋に殘んの暑を拂ふ水ば案内の客設け心に苦のない腰元ども一つところに寄こぞり何と照葉今日は都から上使のお入其中に取わけて大内義弘様歸國の次手殿様を見舞かてらのお立寄したがいつぞやから殿様はむつかしい智恵が入やふ思案にくれて閉籠りお傍仕へは森の娘子雛絹様只お一人奥様にさへお逢ひなされぬアリヤマアどふいふ事ぢやあうといへば深雪の發才がコレこなたは知ずかやあれはのふ嚴御を連て戻り嫁

にする氣はする氣なれど若殿より大殿がアヽコレ〳〵〳〵そんな事いやつたら唐迄きこへたこはい殿様睨み殺されふも知れまいぞやヲヽそれでも百日が間たつたおふたりチホヽヽいか様そこも有はいのと何の遠慮も高咄し後は笑ひの折からに早御上使の御入と案内の聲に恟りし部屋へ入る後玄關よりのけ反通る時政の近臣鞠川玄蕃伴ふ人は隣國に大家と名にし大内義弘優美に餘る長袴しづしづと打通れば出向ふ奥方しとやかに遙こなたに手をつかへお二方とも遠路の御來駕夫正清速にお迎へ申筈なれども歸國の日より百日の心願有と閉籠り他門はもとより一家中通路無用と堅く言付日頃の氣質詮方なく女の出向いお救しなされ下さりませと折目高鞠川玄蕃心に默きスリヤ正清には別間に籠り餘人に對面いたされぬとな。併主人北條殿大切なる内意の上使ぜひ直談と立上るを義弘押留め先待れよ百日の齋戒もけふ滿願に及ぶと有暫しの猶豫がサ無にもなるまじ某とても加藤氏に何卒面談致したいイヤナニ奥方よきにお取次サアわらはとても逢見ぬ夫つきそふ姫に言入させたへ有まで暫しの内ハテむつかしいイヒヽヽヽ然らば暫時休そく致す大内殿にも客殿へアイヤ拙者は後よりまづお先へソレ腰元ども御案内と葉末があしらひ鞠川は胸に工みの舌なめづり案内に連て入にける義弘後を打ながめ前後に氣配り聲をひそめ奥方には嘸御心配正清殿の御病疾容体はいかゞでござるなエヽ何とおつしやる夫正清病氣とはイヤサおかくしなされな入魂の義弘他言は致さぬ御大切にござらふがやサアわらはとてもいつぞやより對面はいたされ共障子隔て夜毎の窺ひも常にかばらぬ詞付ハテナア此國の分野にあたり主星光りを失ふ天變ムヽ善か惡かと名將も暫し疑惑の折こそあれ下りおらふ〳〵と口々にさゝゆる奴が首筋元兩手に引さげのつさ〳〵行尺合ぬ上下も借着と見へし大男ここしに付けたる繩のはし引づる樽の孤づゝみ宙にぶらりの角介丸平いびつになつて反打たりハヽヽヽヽ登り日和の追風を捨是の旦那を見舞ふと態〳〵上つた灘右衛門といふ船頭じやはいハアヽいか様事を分て言を聞けば船頭に違はぬ證據、灘右衛門が荒か

つた、なる程そふだ〳〵とでつかいしけに合ない内と尻に帆かけて逃て入る見向もやらず件の男椽先にもみ手して、へゝそこにござるはおゐさんじやな且那殿の御病氣マゝお心遣ひでござりましよいつぞや唐へござつた時雇はれた此灘右衛門見舞の印はコレ積合したこのつと樽生ぐさものは此葉づと少分ながらと差置けば奥方猶も氣にかゝり義弘様の仰さいひ堅固にござる我夫を灘右衛門とやらも同じ見舞ハテふしぎなとつ置つ思案の胸もさは立葉末義弘押へてアイヤ〳〵奥方正清殿は壯健なるぞイヤサ病氣杯とは彼めか麁忽殊に土産のその藁苞海魚にあらぬ金氣殺伐サ披露は追て先歸れハアそんなら且那殿はいよ〳〵御無事にござるかないかにもかばらぬ大丈夫とさあらぬ詞に根を押てムゝ此國の主にたとへし星の光りに存命叶はぬ印が有つてスリヤ其方が天文をこなた様にも藁苞をハアテしるも知ぬも加藤氏に對面の上取次致さふヤ有難いはハゝゝゝ御大身のお取次とてもの事に此酒樽お頼み申と義弘の頭上を目がけ打付る兩手にしつかとハゝゝゝそちが酩酒の此つと樽義弘慥かに届けくれるそんなら且那殿に逢迄はお暇所にやかゝり船、チゝ何日なり共休足しや義弘さまにも奥の間へ然らば後刻と藁苞を手に携へし名大將碇おろした一曲者引別れてぞ入る、後に殘る薬末は氣も濟ず案じ重る時しも有れ城間俄に騒しく若且那の御歸國と呼ばるゝ聲に數多の同勢早かごを引ばる白布白砂蹴立廣椽先に舁すへたり、見れば我子の主計之助火急の早打息切を潤す母が氣付の水、コレ〳〵主計之助母じやはいのふ〳〵コレ主計のふと呼生られ初めて正氣付たる主計ヤ母様チゝ爰は本城かハゝア嬉しや〳〵忝なや父上様の御容躰御大切に及ぶと聞最早御逝去なされたかサゝゝゝゝ早ふ聞して下さりませと言後聲もせき切て涙と俱に尋ぬれば母は興さめゝゝや何事そなた迄が同じ様正清殿を御病氣とは、イヤ〳〵〳〵おかくしなされないつぞや父上歸國の砌森氏と緣邊和談の取結び酒に仕込みし時政の奸計これ是に當りて三左衛門殿其日に落命有し故正清さしもの勇將なれ共本國迄は叶ふまじと此頃都の風説を聞て苦しむ六日

以前森の後室柵殿私と共に招き寄せ正清病氣の聞へ有汝見舞として本國に馳下り存生ならば使者は私死後の使者は柵殿と生死二つの御教書を二人へ分て賜はりしは父の安危を探らん計畧チヱヽ憎しとは思へども胸をさすつて取急ぎ着岸の津より後室に先立早駕氣は早鐘かけ來りしも母上に父の樣子を聞たいばつかり國の大事を思し召おかくし有は斷りながら心に覺悟も致したし、コレ〳〵〳〵包まず明し賜はれと思ひ込だる物語り始終を聞て又恟りヲヽ思ひ合せば最前に合點の行かぬ灘右衛門義弘殿の詞のはし割符を合す今この時宜心元ない夫の安否正すは主計コレ斯々と耳に口そんなら父に付添居る雛絹殿にサそなたが逢て問が近道ハヽア畏り奉るコレ必ず密に心得ましたとゆふぐれ時鐘の響は寂滅爲樂胸にこたゆる親と子が引別れてぞ。

（床本）**正清本城の段**

〳〵行く先は二重に建し思惟の間、人の出入は止むれど、秋を告來る風の聲庭の木草におとづれて、すだく虫さへ物凄き。我本城へ我ながら、心置く露踏分けて、窺ひ來たる主計之助、隔の垣に身を寄せて、母のをしへの綱手繩、引けば鈴虫それぞとは、豫て松虫雛絹が、手燭攜へ庭におり。母樣お越遊ばしたか、イザ此方へとゆふしでの、神の結の縁ぞとは、思ひがけなき主計之助、ノウなつかしやと雛絹が、切戸押明け走り寄り、夢ではないかと嬉しさの、後は詞も泣計り詞ヤレ音高し〳〵密に密に、先何よりは父の身の上、餘人を遠ざけお身一人、おそば仕へ有りと聞く、物いみなりとは心得ず、コレ樣子聞かして下されと、すかしなだめて尋ぬれど、こなたは猶もすり寄つて詞コレ申し、久しぶりで逢ふた私、無事にあつたかかはらぬかとたつた一言おつしやつても、不孝のとがにもよも成まい。其お心とは露しらず、都でお別れ申してより、勿体ないこと乍ら、父樣母樣を、思ふ案じはどこへやら、あなたの事が苦になつて、ほんに寢た間もわすれ兼れ、逢ひたい見たいとあけくれに、こがれしたふてゐる物を、聞えませぬと娘氣に、後や先なるうらみ言、詞ホヽ尤もながらそれは内證、けふ國へ歸りしは、我のみならず母御も

同船、湊口より魁せしは、父の安否を尋ねん爲め、コレ御病氣に相違あるまいがの。アイ別間の樣子は母樣始め、誰にも云ふなと口留なれど、さうおつしやればお食も少し、折々手箱の草の根を、出しておめがりなさるゝ、計り、亥の刻よりは樓にて、御祈念有るも只お一人。ムゝそれこそ仔細ぞあらん、母上お聞なされたか。委細は是にて聞ましたと、思ひがけなき切戸のかげ、出づる薬末を見て悄り。樣子あかせし案じ顔。母は娘を押し靜め、別間に向ひ手をつかへ詞都の御所より上使として、主計之助參上と、取次ぐ母の詞より、外にこたへもなき折ふし、あやしや庭の草隱れ、あらはれ出でたる數多の鼠、コハいぶかしと三人が、すかしながむる間もなく、透をつたひて樓閣へ、連々として入るよと見えしが、俄に人聲烈しき物音、スハ一大事とかけ寄る障子、蹴はなす別間は燈火も、消えてわからぬ眞暗がり、數輩を相手に正清が、或は捻首手足をもぎ、あたるを幸ひ人つぶて、投げ出す庭先主計之助、得たりと仕留る早速の働き、後に控へし鞠川玄蕃、正清やらぬとしつかと組む、ふりほどいてかんづとつかみ、膝に引敷大音上詞ヤア鼠と變じ我居間へ、間者を入れしは時政の家來、忍びに名を得し鞠川よな、首引抜くは安けれど助けかへすは都へ使ひ、我存命を物語れと、宙に握つてゐいやつと、投げ越すからだは堀の外、鼠となつて逃げさりけり。主計之助は父の聲、聞く嬉しさにさし寄つて詞時政公より父への使ひ、何にもせよあかしを照し、御教書御披見下されと、椽側に直し置く。披きもやらず高笑ひ、詞ハゝ此書面見るに及ばず、日本無双の正清を、咏方に付けん何んどゝは、あさどき計略、ヤイ主計之助、おのれ生年十七歳、忠孝信義の是非をも分たず、大切なる幼君の、守護に殘せし效もなく、時政の甘き詞にたらされて、おめ〳〵と歸つてうせたは、女に迷ふ大馬鹿者、御教書などゝは穢らはしと、引さき庭へ投げ捨てたり。主計はハツと赤面の聞なければ母が引取り詞そりや餘りお氣づよい、何ぼうお氣に叶はいでも、助けられたる恩は恩、あの子の難儀になる事を、思ひ返して給はれと、

母の願ひも慈悲なりし、思案を極め主計之助、座を立上つて、實に誠、詞親子兄弟鉾楯と成るも、戰國の常武士の習ひ、母上御無事とかけ出すを、アヽコレ〳〵、其一言が敵味方侍の義と云ひながら、母が悲しさ此子が思ひ、後の歎を推量して、マア〳〵待つてたもいのと、母が諫に雛絹も、たとへお返事遲くとも、父上都にましませば、お首尾惡うはなされまい、頓て母様お越まで、待つて給はれ待つていのう、詞コレ〳〵申し舅御様、親子夫婦の生別れ、不便と思し只一言、お留なされて下さりませ。お慈悲〳〵と手を合せ、拜む内にも戀人に、離れ難たなき女氣は、哀れにも又いぢらしき、詞ホカヽ娘が願ひ去る事乍ら、執なしすべき三左衛門は、さくに落命いたしつらんが、女の緣に主計之助、其身を立つる心なるや。アイヤ、父上の御意共存ぜず、三左衛門殿死去有る事御存し有れば猶もつて、御身の上氣づかはしく、立歸りしは變ある時、此の本城を守らん爲め、ハヽヽヽ何さ〳〵、譬いかなる變ある共、六十餘州と釣がへの正清が此本城、いつかな〳〵人手に渡さぬ、此身此儘樓にて、四海を守護する我精神、あと構はずと幼君へ、忠義を立つる心を見せよ、親子の對面是限りと、烈しき詞諸共に、はたと立切る障子の内詞ハア其賢慮を聞く上は、所存を立てヽ御目にかけん、此一封は雛絹殿、後にて披見致されよ、母上様御さらばと云捨てヽこそかけり行くノウコレ待つてと雛絹が、夫を慕ふ娘氣に、よべど詮方泣き倒れ、伏沈みたる計りなり。泣聲聞いて母ハ、小影を立出で傍に寄り、詞ノウ雛絹何ぼうこがれ慕ふても、主計殿には添れぬはわいのう。ヤアかヽ様かそりや又何故でござります。オヽ驚きは尤もぢやが、コレ夫の最期もお主の業、恨に甲斐なき家來の我々、緣を切られば主計殿は、時政公に助けられし、恩に命を捨てればならぬコレ引別るヽも操ぢやと、諦てたもいのう、證據は殘せしソレ其文と忍びの燈火差寄すれば、涙ながらに押開き詞ナニ〳〵父の仇たる時政の忠臣森氏の娘なれば、所詮添はれぬ敵同士、緣切る上は一旦の恩も情も是限り、ハアはつと計りに讀さして

正体涙にくれけるが、覺悟極めて懷刀、咽にがばと突立つれば、はつと驚く母と母。ヤレ早まつた何事と抱起して介抱に、娘は苦しき顔を上げ詞ノウ早まつたとは愚の仰せ、主計樣に添れずば、斯う成り行くは身の覺悟、アヽ思へば果ない私が身の上、父の最期と云ふ事も、今聞く迄は夢にもしらず、御無事でござると思ひ詰め、仇に暮した不孝者、其罪科が報ひきて、二世を誓ひし戀仲も、けふを限りと成果しを、可愛い事ぢやとおぼし召し、未來は女夫にならるゝ樣、執成頼み上ますと、今死る身の際までも、輪廻に迷ふ心根を、思ひやりつゝ二人の母、いぢらしいやら可愛いやら、胸一杯にせき上げて、とかうの詞泣倒れ、心も亂るゝ計りなり詞ホヽ雛絹が最期の願ひ、加藤主計之助清郷、是にて承知いたせしと。ひらく閣には父正清、以前にかはる六具の出立、妙法蓮華の七字の旗、主計が俗名書添へて、弓手に押立て座したる姿、武威三軍に鳴ひゞき、唐國迄も今の世に、おぢ恐るゝも理なり。妻は見るより詞ヤア〳〵〳〵我子の佛果を其旗にお書き有りしは死ぬるのを、御存じあつてか何故にと、問ふもうろ〳〵柵親子、倶に樣子を氣遣へり。詞オヽ時政の恩を請けまじと。我强く云ひしは都にて、命を捨てよと敎へる謎、親が胸中能く知つて、歸國以前に雛絹へ、離緣の狀を認めしは、女に心引されず、忠義に死る伜が潔白、ハヽア健氣にも出かしたり、それに連添ふ身程有り、娘が貞女も育がら、我子へ立つる心の操、ホヽ遖なり雛絹、敵と成り味方と成るも此世の業、せめて未來は佛果の緣結んでくれんと此旗に、二人の俗名書付けしは、親がゆるせし夫婦のかため、コリヤ寂光淨土に生を受け妻よ夫と睦じう、誰憚らず添ひとげよ。南無妙法と閉づる目に、不便の涙はら〳〵〳〵、唱ふる經も口の中手負ひの耳に通じけん。詞エヽ有難うござります、其お許しを詞きまして、嬉しう成佛いたしまする、主計樣には覺悟とは、悲しい中にも私が樂しみ、あの世の道で待合はせ、一つ所に參ります、二人の母樣舅御樣御息もじでと計りにて、娑婆の名殘はにつこりと、笑ふて息は絶えにけ

り。ハア悲しやと柵葉末、死骸に取付き抱きしめ、身も世もあられぬ悔言、詞生れて此かた二親の、手もと放れぬ此娘、よく〳〵思ひしたへばこそ、百里二百里此國へ、勇ますんで只一人、來た心根がいぢらしい夫婦となつて其日から、國と都へ引わかれ、死る今迄一夜さも、添臥しもせぬ薄い緣、結んだ神も恨めしいそればかりか夫にもおくれ、殘る一人のいとし子の、自害するのを見やう迚、はる〳〵來たは何事と、甲斐亡骸を右左、おしや可愛の數々を、露置く葉末柵も、數へ立て數へ立て、涙々は漲りて、滿くる汐の荒岬涙打寄するが如くなり。歎きの中へ難右衛門、息を切らしてかけ戻り詞コレ旦那殿、小薩に忍んで樣子を聞き、息子殿を助けうと、追つかけた一里の松原、長持へ入れかけ出す所南無三寶と走付き、組んづ轉んづして見たが、多勢に無勢雲霞、跡に殘つた此狀箱、上書は加藤氏へ、湖水の某、お前は知つてござりますかと差出す、樣子を聞いて正清は、物をも云はず封押切り、詞や八十川の其源は變るとも、心近江の末をみづうみ、フウハレ心地よき秀句ぢやなと、吟ずるこなたに聲高く詞ホ〜ウその歌の心は大内義弘、疾より是にて承知せり、正清殿に對面せんと、明智の大將物薩より、欣然として出たまひ、携へ持つたる葉苞の、中なる劍取り出し、詞燒刄にあらはす足下の本心、よく見られよと差出せば仔細あらんと頂戴有り、とつく詠めて拔放せば、俄に一天照かゞやき、北斗に映ずる劍の光、赫々たる其有樣、正清はつと押し戴き、詞これぞ北辰尊星より、授かる處の七星丸、それがし年來守護せし名劍、幼君の御味方になるべき勇士を選出し、劍を渡し下されよと、片岡殿へ賴置きし甲斐あつて、劍を證據に來たられしはそれなる船頭、誠は備前の住人

兒島元兵衛政次殿、今日只今幼君の味方に屬する割符の一腰、慥に落手仕ると、劍を鞘に納むれば、詞異議なく兒島元兵衛、眞中にどつかと座し詞ホヽチ、適眼力正清殿、片岡氏に盟約せし、我本名を藁苞に、包みかくせし劍の割符、後藤元兵衛政次なり、某味方に屬する上は、先君恩顧の諸侯と語らひ、スハ合戰の時來らば、近江路に根城を構へ、美濃信濃路へ出張して、時政が多數を切所にさゝへ、追詰め〳〵泡吹せ狸親仁が白髮首、引さげんは瞬く內我方寸の胸にありと、勇みすゝみし勢ひは軍師とこそはしられけれ。義弘につこと打笑ひ、詞ホヽヽヽコハおこがましき兒島が廣言、國戚たる北條に、刄向ふ心底聞捨ならず、併し小田家より思義を請し事なれば、只何事も餘所に見ん、今の一首に八十川や其源とあらはして、主計之助を助けしは、近江源氏に隱れなき佐々木左衛門高綱ならん、二人の軍師揃ふ上は、最早安堵の加藤氏、我察祝仕ると、始終を計る名將の、詞は鐵石後楯、實に大國の主なり。正清きつと空打眺め詞アレ〳〵〳〵光りを失ふ將星の、今迄地下に落ちさるは、北辰尊星感應あり、百日の滿類に、佐々木兒島の兩大將、味方に加へし今月今日、アラ悅ばしやといふ息ざしも心のたるみ、忽ち變る其面色、見るに葉氷か又恟り、扨は噂に違ひなき、お身の惱みか悲しやと、すがり歎けば、ヤアおろか〳〵詞時政がたくみは知りながら、否まば違勅におとさん方便、元より命は天にあり、とはいひながらお通のかた、斯なる果は御存じなく、歸國の砌り幼君を、われに抱かせくれ〳〵も、お賴みありしその時は、勿体なしともいたはしとも、百萬軍の强敵を、摑み挫ぎし正清が、五体をつらぬき、肉を裂くより辛苦かりし、其心を休めんと、百日の今日まで、胸

を苦しめ身を苦しめ、祈り〳〵し甲斐あつて、念願届きし我身体、此の樓にとゞむべし詞三左衛門の落命も、時節とあきらめ柵殿、葉末も共にさまをかへ、都の忰が先途を見よ、さるにても嫁雛絹、さぞや忰を待ちわびて、くさ葉の影を行きなやみ、迷はんことの不便やと、百錬の明鏡を、照らすが如き兩眼に、血汐をそゞく計りなり。歎きをとゞめ兒島元兵衛、此上は葉末殿柵殿、此の政次が付添ふて、子息の安否を尋れし上、佐々木に牒じて治國の計策、日本はおろか唐高麗、及向ふ奴ばらみなごろし、幼君四海太平を、その樓に安座して、見物あれよ加藤殿とつゝ立上れば、大内義弘詞ホーチ勇しい兒島政次、しかし天運いたらずば、幼君の御供して、我本國へ來られよと、殘す詞は義弘が、妻と妻へも末々を、いさめて直ぐに歸國の船路、女心の二人連れ、こなたも法の蓮葉に、至らせ給へ南無妙法蓮華經南無妙法蓮華經〳〵、唱ふる功德は先の世に、頓てぞめぐり愛別離苦會者定離とは聞ながら、歸らぬ事をくりかへし、おさらばの聲ばかり、後に名ごりは升がたを、出づる本城外曲輪、注進引はえし樓に、端座合掌古今の英雄、見上る空に星象光、照らす威德ぞありがたき。

八幡里引段の窓

中（豊竹和泉太夫 竹本貴鳳太夫）
（竹澤團六 鶴澤芳之助）
切（豊竹古靱太夫 鶴澤清六）

人形

南方十次兵衛	吉田榮三
女房お早	吉田文五郎
與兵衛母親	吉田小兵吉
平塚丹平	吉田文作
三原傳造	吉田光之助
濡髪長五郎	吉田玉松

中 **双蝶々曲輪日記**

八幡里引窓の段

この淨瑠璃は近松翁の「壽の門松」と西澤一風、田中千柳の「昔米萬石通」を併せて脚色されたもので寛延二年七月竹本座が初演であります作者は竹田出雲、三好松洛、並木千柳の合作、この「引窓」は八冊目になつてゐます。この段の内容を申しあげますと、人殺しをしてお尋ね者となつた相摸取の濡髪長五郎はせめて一眼母親に會ひたいと八幡村へ落ちてゐつたが、其家は南與兵衛とて今は侍に取立てられて南方十次兵衛と名乘る家、與兵衛の義理の母お幸は長五郎の實母であるので新に名字帶刀を許された與兵衛は既に人相書まで廻つてゐるこの長五郎を召捕れば大手柄であるが、母の心も察して繩打つこともならず暮れ六つ過ぎれば與兵衛が役、女房お早も引窓を明けてまだ日が高いと言ふ、母と夫への氣の遣ひ、眼を閉ぢて長五郎を見遁してやる與兵衛の心、その義理立の溫情を拜む母お幸が子への愛着は、長五郎の前髪を剃り落して人相を變へ河内へ落してやるといふ義理人情の柵に縛られて人の世の相を巧みに描つた名作であります。すでに古靱太夫の語り物として有名なもので御座ゐます。

（床本）**八幡里引窓の段**

出入や月弓の八幡山崎南與兵衛のお祖母我子可愛かかれを出せさと諷ひ

しを思ひ合せば其昔八幡近在隱れなき郷代官の家筋も今は妻のみ生のこり神と佛を友にして秋の半の放生會よみや祭りと待宵とかけ荷ふたるそなへもの、母は神棚しつらへば嫁は小いもを月代へ子種頼みのよれだんご月の數ほど持出るコレ嫁女月見の芋はあすの晩けふは待宵殊に日の内からは早い〳〵是はしたりお前があすの放生會をけふからおそなへ遊ばす故何んにもかも宵日からすることゝヲヽ笑止コレ其ヲヽ笑止はやつぱり廓の詞大阪の新町で都といふた時とは違ふ今では南與兵衛が女房のお早近所の人がきたとたばこ吸付て出しやんなや今でこそ零落たれまへは南方十治兵衛といふて人もうらやむ身体連れ合がお果なされてから與兵衛が放埒郷代官の役目もあがり内證も仕もつれこなたの手前も恥かしい事だらけ、さりながら此所の殿樣もおかはりなされ新代官は皆あがり古代官の筋目をお尋ねにて與兵衛も俄のお召し昔にかへるは此時と雜行なれども神いさめの供へもの蚤の息が天とやらお上の首尾が聞きたいのイヤモウそれはお氣遣遊ばすなおまへの其お心が通じて御出世でござりましよ早ふ吉左右聞けしましたやと待兼見やる表の方編笠にて顔かくし世を忍ぶ身の後や先見廻し立寄る門の口嬉しや爰じやとずつと入る母は見るよりヤア長五郎か母者人濡髮樣か都殿是はしたり扨は願ひの通り與兵衛殿と夫婦に成つてかマア悦んで下さんせ、わしを請出した權九郎は根が贋幽仕で牢へ入る殺されたたいこ持は盜人のうはまへ取りで追剝に成つて殺し德何んの氣がゞりなう添つて居やんすハテ仕合せな事同じ人を殺しても運のよいのと惡いのとハテ仕合せな事じやのイヤコレおはやしみ〴〵とした咄しじやがそなた衆は近付かアイ曲輪でのお近か付あの與兵衛もかイヤ是はつゐ一ト目知る人じやが又長五郎樣がお前を母樣とおつしやる譯はヘヲヽふしぎなは道理〳〵どふで一度はいはねばならぬこの長五郎は五つの時養子にやつてわしは此家へ嫁入與兵衛は先妻の子でわしとはなさぬ仲故に其譯しつても知らぬ顔あそこや爰の手前を思ひかつふつ音信もせなんだが去年開帳參りにふと大阪で見付年たけてもてゝ

ごの譲りの高煩の黒痣もしそなたは長右衛門殿へやつた長五郎ではないかと問つとはれつ昔語り養子の親達も死失相摸取になつた咄し歸つて與兵衛に咄さうかと思ふたれど以前をしたひ尋ねてもいたかと思はれるが恥しさに隱しては居たがかうしらけて來たからは戻られたら引合し兄弟の盃おはずからずに嫁共に子三人わし程果報な身の上はまたと世界に有まいと悦ぶ親の心根を思ひやる程長五郎あすをも知れぬ我命としられぬ母のいたはしやと思へばせきくる涙をかくしイヤ申し母者人與兵衛殿がお歸り有ふと拙者がことお咄し御無用なぜ〳〵イヤ相摸取と申す者は人を投げたりほつたり喧嘩同然勝負の遺恨によつて侍でも町人でも切つて〳〵切まくりぶち放してマアそんな事私は致しませれど男を達過して一家一門へなんぎのかゝる事も有るものまあ此商賣仕廻まではおまへともあかの他人悴持つたと思し召して下さるな何ん時しれぬ身の上是がお別れにならふも知れずおはや殿與兵衛殿へも母の事頼みまするといふて下され長崎の相摸に下りますればながふお目にかゝりますまい隨分御息災でおくらしと打しほればヤレそんな商賣せいで叶はぬか長崎へもどつこへもいかずと此内に居て與兵衛と倶に問談合其恰朴では何さしたとて仕かれはせまいノウおばやそふでござりますとも御兄弟といふ事ぬしも聞ましたら悦ばれましよマアお茶漬でもナお袋樣イヤ〳〵初て來たものの論でもしませうあのからだへは牛蒡の太煮鮪の料理が好で有。氣が晴れてよい二階座敷淀川を見て看にして一つ呑やうぢ〳〵せずといきやいのどりや搾よとまな板や薄刄の鍋は身より出死出の出立ちの料理ぞと思へばいとゞ胸ふさがり申し何んにもお構ひなくともがけ椀で一つ盃切ついたべて歸りましよと母の手盛を牢ぶちと思ひ諦めたばこぼんさげて

二階へしほれ行人の出世は時知ず見出しに預り南與兵衛衣類大小申請伴ふ武士は何者か所目なれぬ血氣の兩人家來も其身も立どゞまり是も貴公の御宿所となイザ御案内お先へと互に辭儀合ひ南與兵衛いそ〳〵として内へ入母者人女房只今歸つたヤアお歸りか戻りやつたかお上の首尾

はどふじやの〳〵お悦びなされ極上々ソレハ嬉しい。則ち此如く衣類大小下し置かれ名も十次兵衛と親の名に改め下され昔の通り庄屋代官を仰付けられ七ケ村の支配ヤレ〳〵それは目出度い事ム見れば表にお歴々が見へるがありやマアどなたそあれは西國方のお侍密々に仰せ合さるゝ事有て御同道さして隱す程の事ではなけれど暫く母人も御遠慮女房も用事有迄差控へよと言渡し表へ出れば嫁姑今からは武士付合遠慮が多いと物馴し母と嫁とは立別れ奥と口とへ入にけりイザお通りと兩人の武士を上座へ押直し今日殿の御前にて仰付けられし密の御用仔細は各方に承はれとの儀先其お尋ね者の科の樣子お物語と尋れば年がさなる侍取あへず拙者は平岡丹平是成は三原傳藏と申て主人の名はお上みにもよく御存知當春大阪表にて兩人の同名ともを殺され方々と詮議いたせど討たる相手行衛知れず此間承れば此八幡近在に由縁有て立越たと申、去るによつて當役所へお頼申せしに兄弟の敵隨分見付け召捕れよ併し夜に入ては當地不案内所に馴たる者に申付繩かけ渡さんと有てナソレ貴殿へ仰付られた仔細と申は斯の通りと語るを一間に母親が耳そば立つればこなたには女房お早が立聞きの虫が知らすか胸騷ぎ與兵衛は何んの心も付ず然らば敵討同然穩密〳〵もし左樣の儀も有ふかと母女房迄退け御内意を承はる何んと其討たれさつしやつた御同名の御名はな身が弟は鄕左衛門手前が兄は有右衛門アノ平岡鄕左衛門三原有右衛門とな、いかにもフムウ御存知かなイヤ承はつた樣にもムゝして其殺したる者は何者サア其相手は相摸仲間で隱れもなき濡髪の長五郎と聞て母親障子をぴつしやり。おはやは運ぶ茶碗をぐはつたりハテ不調法なと呵る夫の傍に座し猶も樣子を聞ゐたるシテ御兩所は何國を目充先此丹平は當所を家捜が致したい御尤〳〵傳藏殿には思し召寄ば何と、手前が存るには最前其元へお頼申た繪姿を村々へくばり置き油斷の体に見せどか〴〵と踏込牛部屋柴部屋或はコウ二階などを吟味致したいてへゝゝゝ夫も尤アゝ大きな体下家にはおりますまいとかく二階が心元ない、先御兩所は楠葉橋

本の邊を御詮議なされ夜に入らば拙者が請け取醫相摸取でござらふがやはら取でござらふが見付次第に繩ぶつてお渡し申さん其段そつ共ヤレ〳〵其詞を聞て安堵〳〵イザ丹平殿の楠葉邊へ參ふか、いか樣日の内は隨分我々働夜に入てお賴み申す肝心早お暇然らば又晩程役所にて御意得ませう左樣〳〵と目禮し二人の武士は立歸るおはやは始終もの案じさしうつむいてゐたりしが申與兵衛樣あちな事を賴まれなされ長五郎とやらを捕つて出そとの請合はそりやマアおまへほんの氣かへハテけふとい物の言樣あの侍に由緣もなく元より長五郎に遺趣もなけれど今の兩人が願ひによつてお上より此與兵衛に仰付けられた其仔細はアヽ彼の關口流の一手も覺ゐる事お聞及び有てやナニ役人共に申付ける筈なれ共當所へ來て間もなく不案内住馴た其方に申付ける日の中はあの方よく詮議せん夜に入ては此方よりすみ〳〵迄詮議し何卒搦捕て渡せ國の譽と有てのお賴みイヤモ一生の外聞召捕て手柄の程を見せたらば母人にも嘸お悦びイヱ〳〵〳〵何のそれがお嬉しからふぞ。なぜ。ハテ昔はとも有れきのふけふ迄は八幡の町の町人生兵法大疵の基とひよつとおけがでもなされた時はお袋樣の悲しみ何のお悦びでござんせふイヤいらざる女の差出。わりや手柄の先をおるかハテ折も一つはお前の爲、ヤアこいつが、何で濡髮をかばひ立て但しは儕か一門か何にもせよ御前で請合見出しに合た此與兵衛今迄とは違ふ詞がへさば手は見せぬときつぱ廻せばヤレ夫婦の爭ひ必無用と母は一間を立出最前からの樣子殘らずあれにて聞ました、何んと其濡髮の長五郎といふ者そなたよふ見知つてかサレバ一度堀江の相摸で見受其後色里にてちよつとの出合イヤモ隱れもない大前髮たしか右の高頬にほぐろ見知らぬ者も有ふと有つて村々へ配る人相書コレ御覽なされと懷中より出して見せたる姿繪をどれと見る母二階より覗く長五郎手水鉢水に姿が寫ると知す目早き與兵衛が水鏡きつと見付けて見上るをさときおはやが引窓ぴつしやり内は眞夜となりにけるこりや何とする女房ハテ雨もぽろつく最早日の暮灯をともして上ませふムウハテナはてな

あ面白い〳〵日が暮たれば與兵衛が役忍びおるお尋者イデ召捕んとすつくと立ちそれまだ日が高いと引窓ぐはらり明て言れぬ女房の心づかひぞせつなけれ母は手箱に嗜し銀一包取出し是はコレ御坊へ差上永代經をよんでもらひ未來を助からうふと思ふ大切な銀なれ共手放す心を推量して何と其繪姿わしに賣てたもらぬかムウ母者人二十年以前に御實子を大阪へ養子に遣はされたと聞たが何と其御子息は今に堅固でござるかな與兵衛村々へ渡す其繪姿ごふぞ買たいハアゝ鳥の粟をひらふ樣に溜置かれた其銀佛へ上る布施物を費しても此繪姿がお買なされたいか未來はならくへ沈むとも今の思ひにはかへられぬわいのハアぜひもなやと大小投出し兩腰させば十次兵衛丸ごしなれば今迄の通りの與兵衛相かはらず八幡の町人商人の代物お望ならばへゝ上げませふわいあの賣て下さるかそれではこなたのアイヤ申し日の中は私が役目ではござりませぬハアゝ添けなやといたゞく母袖はかはぬ涙の海嫁は見る眼を押拭ひイヤ申し與兵衛樣あんまり母御樣のお心根がいたはしさに大事の手柄を支へました嘘憎いやつ不屆者とお呵も有ふが產の子よりも大切にかわいがつて下さる御恩せめてはお力にと倶々に隱しました常々からも萬事の品包むと思ふて下さんすなと中に立身のせつなさを言譯涙に時移り哀れ數添ふ暮の鐘くまなき月も待宵の光り移ればや夜に入れば村々を詮議する我役目アゝ河内へ越る拔道は狐川を左りに取右へ渡つて山越に〳〵アよもや夫へは行くまいとそれと知してかけ出る情も厚き藪だゝみ折から月の雲隱れ忍びて樣子を窺ひ居るこたへ兼たる長五郎二階より飛で降り表をさしてかけ出すを母は抱き留めヤイうろたへ者どこへゆくイヤ最前より尋常に繩かゝらふと存じたれ共あんまりと申せばお志の有がたさ眼前歎きを見せまじふよりは此家を離れてともこたへにこたへておりましたが與兵衛殿の手前もあり後よりぽつ付きとられる覺悟御赦されてとかけ出すをとつて引すヘヤイ爰なものしらずめおれ斗りか嫁の志與兵衛の情迄無にしおるか罰あたりめなさぬ仲の心を疑ひ繪姿を買ばふと言ひかけたは見

遁してたもるかたもらぬかと胸の内を聞ふ爲、賣つてくれた其時の嬉しさおりや〳〵後影拜んだ〳〵はやいまだ其上に河内へ越る拔道迄おしへてくれた大恩をおのれや〳〵何と報ぜうと思ひ居るぞいやいコリヤヤイ死る斗りが男ではないぞよ七十ちかい親持て喧嘩口論人を離すと言ふ樣な不孝な子が世に有ふかくると其儘かげ椀に一膳盛と望んだはおのりや〳〵牢へイヤサ牢へ入獄悟じやな、それがごふ見てゐられふぞ〳〵せめて親への孝行に遁れるだけは遁れてくれコリヤ生られるだけは生てたも何の因果で科人になつた事じやとごうと伏前後不かくに泣叫ぶおはやも俱にせきのぼす涙おさへて申〳〵泣てござる所じやないぞへ夜が明くれば放生會で人立が多い今宵の内に落す思案どふぞ姿をかへる仕樣は有まいかなヲ、其れも心付いて置ましたまあ目に立つこの大前髪剃落しましよドレ剃刀アイヤ申母人姿をかへて繩かゝらばよく〳〵命がおしさにと言れるも無念な侍を殺した場で直ぐに相果ふと存じましたが死れぬ義理にて生ながらへ一日〳〵と親の事が身にしみま一度お顏が拜みたさにお暇乞に參つて返つて思ひをかけまするはいアゝイヤ〳〵やはり此儘で與兵衛殿へお渡しなされて下さりませムゝスリヤどふ言ふても繩かゝる氣じやな覺悟致しておりまするよいは勝手にしをれわれより先にと剃刀をア申母者人あぶない〳〵誤りました〳〵サアそんなら剃て落してくれと母が手づから合せ砥にかゝる思ひの有ふとは神ならぬ身のしらがの此身剃べき髮は剃もせで祝ふて落す前髮を涙でもんで剃落す老の拳の定まらずわな〳〵震ふて刄先がきつくりアゝ申二た所迄お顏に疵がアゝひよんなしました幸ひ血留と硯の墨べつたり付けて顏打ながめ大かたこれで人相がかはつたが肝心の見知

は高頬のほぐろ剃落さんと剃刀をあて事はあてながら是こそはてゝごの讓り筐と思へば嫁女わしはどふも剃りにくいこなた賴む剃落して下され私じや迚むごたらしうそれがどふ剃らるゝ物、是斗りはお赦しなされて下さりませ〳〵アゝ思へば〳〵親の筐まで剃落す樣になつたかエゝ心からとは言いながらかはいの者やと取付てわつと斗りに泣沈む折もこそ有れ門口より濡髪取つたと打付る銀の手裏劍高頬にぴつしやりはつと身がまへ母はたておはやは灯立覆ひ今のは慥連合の聲長五郎樣顔のほぐろが潰れたぞヘヤアほんに眞に是も情けと母親は表を拜みゐたりしが兼て覺悟の長五郎思ひ設けてどつかと座しサア母者人お前のお手で繩をかけ與兵衛殿へお渡しなされて下さりませコレ長五郎樣お前は氣がのぼつたかとつたと顔へ打付てほぐろを消した連合の心又この打付た銀の包に路銀と書た一筆そこにお心付ぬかヘイヤ其書付もほぐろを消した心も骨にこたへ肝に通りあんまり過分添なさに母の歎きも御意見も不孝の罪も思はれずかたわな子が可愛いとぎりも法も辨へなく助けたい〳〵と母人の御慈悲心暫くはお休めと詞に隨ひ元腹迄致したれ共一人ならず二人ならず四人迄殺した科人アゝ助かる筋はござりませぬ、なまなかな者の手にかゝらふより筐と思ひ母者人泣かず共繩をかけ與兵衛殿へ手渡しゝてよふお禮をおつしやれやヤコレそなふてはこなた未來の十次兵衛殿へ立ますまいがのアゝ誤つた長五郎よふいふてくれたないかさま思へばわしは大きな義理しらず誠をいはゞ我子を捨ても繼子に手柄さするが人間畜生の皮かぶり猫が子をくわへあるくやうに隱しとげふとしたは何事、さても遁れぬ天の網一世の緣のしばり繩おはや其ほそ引でも取て下されイヤそれでは連合の心を無になさるゝ

と申もの唐天笠へござつても此世にざへござればどふしてなりとも又あはれる何かはなしに落しまして下さんせ〳〵イヤのふ。一旦かばふたは恩愛今又縄かけ渡すのはなさぬ中の義理畫はかばひ夜は縄かけ晝夜と分る繼子本の子慈悲も立て義理も立つくさばのかげの親々〳〵への言譯覺悟はよいか、待兼ておりまするとおはやを取て突退〳〵手を廻すれば母親は幸ひ有あふ窓の縄追取て小手縛り突放せば引縄に窓ばふさがれ心は闇くらき思ひの聲はり上げ濡髪長五郎を召捕たぞ十次兵衛は居やらぬか請取て手柄に召されと呼聲に與兵衛はかけ入お手柄〳〵左様なふては叶はぬところとても遁れぬ科人請取て御前へ引女房どももふ何時されば夜半になりませふがヤアたわけ者めが七ツ半を最前聞た時刻がのびると役目があがる縄先き知ぬ窓の引縄三尺殘して切るが古例目ぶんりやうに是からとすらりと拔いて縛縄すつかり切ばぐはら〳〵〳〵指込む月に南無三寶夜も明た身共が役は夜の内斗り明くれば則ち放生會生を放す所の法恩にきず共勝手におひきやれハヽはつと悅ぶ嫁姑あはす兩手のかずよりも九ツの鐘、六ツ聞いて殘る三ツは母への進上拙者が命も御自分へそれも言はずさらば〳〵さらば〳〵の暇乞別れてこそは落て行く

澤市内の段

切　竹本錣太夫
　　豊澤新左衛門
ツレ　鶴澤友衛門
　　鶴澤寛市

人形

座頭澤市　桐竹政龜
女房お里　吉田文五郎
觀世音　桐竹紋太郎

次　**三十三所壺坂寺**

澤市内の段

西國六番の札所大和國壺坂寺觀世音の靈驗を記した名人團平が妻女加古千賀女の筆になり、名人團平が一代の蘊蓄を傾注して節付した名作であります。内容は澤市といふ座頭の女房お里の貞節を叙したものであります、壺坂寺の片ほとりに住む澤市といふ座頭は三つ違ひの美しいお里といふ女房を持つてゐたが、三年このかた毎夜のやうに家を抜け出して往くので澤市は隱し男があるやうに嫉妬します。實はお里は毎夜夜中に壺坂の觀音樣へ參り夫の眼病平癒を祈つてゐたものでした。それと解つた澤市は女房の貞節に泣いて厚い心に謝しましたが所詮は癒らぬ眼病にいつ迄厄介かけるもと壺坂寺の谷へ身を投げますとかけつけたお里も夫の後を追ふて、つゞいて身を投げますその信心の厚さと女房お里の貞節に觀音の利益をたまひ、身は助かり澤市の眼があくといふ夫婦愛を高唱した絶好の世話もので御座ゐます。

（床本）**澤市内の段**

夢か浮世か浮世か夢か夢てふ里に住ながら住ば住なる世の中によしあしびきの大和路や壺坂の片邊り土佐町に澤市といふ座頭あり生れ付たる正直の琴の稽古や三味線の糸より細き身代の薄き煙りの營みに妻のお里は健やかに夫の手助け賃仕事つゞれさせてふ洗濯や糊かいものを打盤の音も幽のくらしなり鳥の聲鐘の音さへ

身にしみて思ひ出す程涙が先へ落てながるゝ妹脊の川をチヽ是は〳〵澤市様けふは何と思ふてやら三味線出してよい機嫌じやのホヽヽチヽお里かそなたアノおれが三味線彈をよい機嫌に見ゆるかやアイナアハテナアおりやそんな氣じやないわいのモウ〳〵〳〵氣が詰つて〳〵いつそ死でものけふヱヽイヤサアノ死んで仕廻程氣がふさいでならぬわいのふイヤコレお里わしやそなたにチト尋ねたい事がある。マア〳〵下に居や〳〵ハテ扨下に居やいのふ外の事でもないがいつぞは聞ふ〳〵と思ふて居たが丁ど幸ひ光陰矢の如しとやら月日の立はマヽ早いものなアソレわがみとおれがコウ一所に成てからモウ三年稚い時より許嫁互に心も知つて居るにマなぜ其様に隱しやるぞさつぱりと打明て言てたもと何處やる濁る詞のはしお里は更に合點行かずふしんながらにコレ澤市様そりやお前何を言しやんす嫁入してから三歳のあいだモほんに〳〵露程も隱し立した事はござんせぬが夫共に何ぞ又お氣にいらぬ事有ば言て聞して下さんせサそれが夫婦ぢやないかいなムヽそふ言やればこつちも言はふチヽ何成共言しやんせチヽ言はいでかコリヤお里マよふ聞けよわれと夫婦になつて丸三年毎晩七つから先寢所へ手をやつても終に一度も居た事がないソリアもうおれは此様な盲殊にゑらい疱瘡でモ見る影もない顔形どふで我の氣に入ぬは無理ならねど外に思ふ男が有らばさつぱりと打明けて言ふてくれたら此様に何の腹を立ふぞい尤もわれとおれとは從弟同士專ら人の噂にもアノお里は美しい〳〵とモ聞度事におれはもふよふ諦めて居る程に悋氣は決してせぬぞやコレどふぞ明して言てたもと立派に言へど目にもるゝ涙呑込盲目の心の内ぞせつなけれ聞にお里は身も世もあられず縋り付てヱヽソリヤ胴慾な澤市様いかに賤しい私じやとて現在お前を振り捨てゝ外に男を持つ様なそんな女と思ふてかソリヤ聞へませぬ〳〵ヱヽ聞へませぬわいなモとゝ様や母様に別れてから伯父様のお世話になりお前と一所に育てられ三つちがいの兄さんといふてくらして居る内に情なやこなさんは生れも付ぬ疱瘡で目かいの見へぬ其上に貧苦にせまれど

何のその一且殿御の澤市様たとへ火の中水の底未來迄も夫婦じやと思ふ計かコレ申お前のお目を治さんと此壷坂の觀音さまへ明けの七つに鐘を聞きそつと抜出で只一人山路いとはず三年越せつなる願ひに御利生のないとはいか成報ひぞや觀音様も聞へませぬと今もいまさて恨んで居たわしの心もしらずして外の男が有る様に今のお前の一言が私はばらが立わいのとくどき立たる貞節の涙の色ぞ誠也始て聞し妻の誠今更何と澤市が詫の詞も涙聲アヽコレ女房共何にも言はぬ堪忍してたも誤つた〳〵わいのふモウそふとはしらずかたわの癖に愚痴計りコレこらへてたもれと斗にて手を合したる詫涙袖や袂をひたすらんアヽコレ連添女房に何の詫お前の疑ひ晴たれば私しや死んでも本望じやわいな〳〵イヤモウそふ言てたもる程わがみの手前面目ないわいのふが夫程に迄信心してたもつてもおれが此眼はコレマ治りはせぬかいのエヽソリヤマア何を言はしやんすぞいな此年月のうき艱難雨の夜雪の夜霜の夜もいとはぬ私がはだし參りも皆お前の爲じやぞへサア夫程に祈誓をかけ願ふてたもつた志有がたい共嬉しい共其貞節なそなたをば此年月の廻り根性觀音様じやといふたとて罰こそあたれ何のマア此目が明いてたまるものか、エヽ何のいな私のからだはコレイナアコレお前の體も同じ事そんな愚痴を言ふよりちやつと心を取なをし觀音様へ倶々にお願み申し下さんせ〳〵と夫を思ふ貞心の心づかひぞ哀なり。澤市涙にくれながらチヽ過分なぞや女房共そふそなたが一心のすはつた上は御佛の枯たる木にも花がさくとやら見へぬ此目はかれたる木アヽどふぞ花が咲したいなといふた所が罰の深い此身の上せめて未來をイヤサアノ女房共手を引てたもいざ〳〵といふに嬉しく女房が身拵さへそこ〳〵にいたわり渡す細杖の細き心もほそからぬ誓ひはふかき壷坂の御寺をさしてヽたどり行傳へ聞く壷坂の觀世音は人皇五十代桓武天皇奈良の都にましますの時御眼病甚しく此壷坂の尊像へ時の方大道喜上人一百七日の御祈禱にて忽ち平癒有らせられ今に至つて西國の六番の札所とは皆人々の知る所實に有難き靈地なり折しも

坂の下よりも詠歌を道のしほりにて澤市夫婦漸々と御寺間近く詣來てコレ澤市樣信心は大事なれど病は氣からといふからはお前のやうに、しほ〳〵とふさいで斗り居やしやんすと猶病ひはおもならふコレこんな時にはわつさりと日頃覺への歌なりと氣ばらしに諷はんしたらどふじやのムゝほんにそふじやのわがみの言やる通りくよ〳〵思ふは目の毒じやそんならアノさらへと思ふてやつて退ふしかし誰も見ていやせぬかなヱゝ儘よ〱憂が情か情が憂かチンツチンツチツンツ露と消行くテチン我身の上はチンチチチリンツテチリツテントンシヤンアイタゝゝゝゝアしもた今けつまづいて後の合の手みな忘れたアハゝゝゝゝホゝゝゝゝと歌を暫しの道草に御本堂へと登り來てサア〳〵澤市樣ソレ觀音樣へ來たはいなハアモウ爰が觀音樣かヤレ〳〵有難や〳〵ハアゝなむあみだ佛〳〵〳〵〳〵コレ〳〵こちの人今宵こそゆつくりと御詠歌を夜もすがら上ませうではあるまいかと夫婦して唱ふる詠歌の聲すみていとしん〳〵と殊勝なる〱岩を建て水をたゝへて壷坂の庭のいさごも淨言成らんコレお里叶はぬ事とは思へ共そなたの詞にしたがふて來る事は來ても中々に此目は治りそふなことはないわいのふヱゝ此人はいのふ又しても〳〵そんな事コレ此壷坂の觀音樣むかし桓武天皇樣奈良の都にまします時眼病にて御惱み夫故に此觀音樣へ御立願なされた時早速御眼が明いたけな夫故お前に勸めるもハテモウ天子樣じやといふたとてたとへ虫けらの樣な我々でもあなたに隔てはないはいなモ兎角信心といふ物は氣を長ふ歩みを運んで心を鎭め一心にお縋り申せば何事も叶へてやろとのお慈悲じやはいのふそんな事をいふ手間で早ふお唱へ申ませふと力をつくればいかさまのふほんに言やれば其とほりそんならわしは今宵から三日の間爰に斷じきする程にそなたは早ふ内へいんで何かの用事仕廻ておじや治るとも治らぬ共此三日の間が運定めヲゝよふいふて下さんしたそんなら私も内へ歸り何かの用事片付て來ませふかコレ澤市樣此お山はけはしい山みち殊に坂を登て右へ行けば幾何丈とも知れぬ谷間じや程にコレかへまへてどつ

こへもチ〻どこへ行ふぞ今夜から觀音様と首引じやアハ〻〻〻ホ〻〻〻と笑ながらに女房が後に心は置露の散てはかなき別れ共しらでとつかは急ぎゆく後に澤市只一人こらへし胸のやるせなくかつぱと伏し〻泣居たるコレ嬉しいぞや女房共此年月の介抱其上に貧苦にせまるもいとひなく只の一度も愛想盡さすあまつさへ目かいの見へぬ此身をば大事にかけてたもろ志それともしらず色々の疑立てコレ堪忍してたも〳〵今別てはいつの世に又あふ事の有べきか不便の者やいぢらしやと大地にごふと身を打伏前後ふかくに歎きしが漸々顔を上げア〻歎くまい〳〵三年が間女房が信心凝して願ふても何の利益もないものをいつ迄生きても詮ない此身世の諺にもいふ通り退ば長者が二人のたとへわしが死のがそなたへ返禮生きながらへていづれへ成とよき縁付をしてたもやヤ〻〻最前聞けばアノ坂を登りて右へ行ば幾何丈共しれぬ谷間との事是究竟の最期所。かゝる靈地の土とならば未來は助かる事もあらんム〻幸に夜は更たり人なき中にチ〻そふじや〳〵と立上り亂るゝ心取直し上る段さへ四つ五つ早曉の鐘の聲、イザ最期時いそがんと杖を力に盲目のさぐり〳〵て漸〻とこなたの岩にかき上ればいともの凄き谷水の流れの音もどう〳〵と響くは彌陀の迎ぞと杖を傍に突立てなむあみだ佛と諸共にがはと飛込身の果は哀成ける次第なり。かゝる事とも露しらすいきせき道より女房が取て返すと氣はそゞろ常に馴にし山道もすべり落やら轉ぶやら漸々登る坂の上ヤアコレこちの人が見へぬわいな澤市様〳〵いのふ澤市様いのふと尋れ廻れど聲だにも人かげさへも見へざれば、あなたへうろ〳〵こなたへ走り澤市様いのふ〳〵と爰かしこ木の間をもるゝ月影にすかせば何か物ありと立寄り見れば覺の杖ハツト驚き遙かなる谷を見やれば照月の光りに分つ夫の死骸ハアこりやマアどふせう悲しやと狂氣の如く身をもだへ飛をりんにもつばさなく呼べど叫べど其からもこたふるものは山彦の谷より外なかりける。エ〻こちの人聞へませぬ〳〵はいな此年月の艱難もいとはぬ私も辛抱はな只一ト筋に觀音様へ願込めて、

どうぞ早ふ眼の明きます樣お助けなされて下されと祈らぬ間迚もないものをけふに限つてこのしだら後に殘つて私しやまあどふなるぞいな、アどふせふぞいな〳〵〳〵ア丶是を思へば最前に諷はしやしんしたアノ歌はどふやら心にかゝつたが今で思へば其時に死る覺悟で有たのかヱゝしらなんだ〳〵〳〵わいな斯言ふ事なら何のマアお前を無理に連れて來ませふ堪忍して下さんせ〳〵〳〵ほんに思へば此身程はりないものが有かいな二世を契りし我夫に長いわかれとなる事は神ならぬ身の淺ましやかゝる憂目は前の世の報ひか罪かヱゝ情なや此世も見へぬ盲目のやみより闇の死出のたび誰が手引を仕てくれふ迷はしやるのを見る樣でいとしいわいのとかきくどきくどき立〳〵歎く涙は壷坂の谷間の水や增るらん。漸々涙の顏を上げマゝ悔むまい歎くまい皆何事も前の世の定り事と諦めて夫と倶に死出の旅マ思へはかたみの此杖を渡すは此世を去てゆく行先導き賜へや南無阿彌陀佛みだ佛の聲諸共に谷間へ落てはかなき身の最期貞女の程こそ哀れなり。頃は二月中ぞらや早や明け近き雲間よりさつと輝く光明に速て聞ゆる音樂の音も妙なる其中にいとも高き上臈の姿を假に觀世音微妙の御聲うるはしくいかに澤市承はれ汝前生の業により盲目となつたりしかも兩人ながら今日にせまる命なれ共妻の貞心又は日頃念ずる功德にて壽命を延し與ふべし、此上はいよ〳〵信心渴仰して三十三所を順禮なし佛恩報謝なし奉れコリヤお里〳〵澤市〳〵と宣ふ御聲諸共にかき消す如く失賜へば早や晨朝の鐘の聲四方にひゞきて明け行く空ほの〴〵くらき谷間には夢とも分かぬ二人ともむつくと起てヤアこなたは澤市樣アヽコ

新秋まづ

南一温泉料理へ

獨特の温泉で爽快なお氣分に
善美を竭す客室で一盞を・・

四ツ橋

お電話の用は
南
5番・701番・711番
(長)132番・5291番
西630番

のまさなみ

南一温泉料理

レこちの人お前の眼が明いて有がなヱヽアノほんにコリヤ眼が明いて有るヲヽ眼が明た〳〵〳〵〳〵〳〵眼が明たチヱヽ觀音樣のおかげ有難ふござります〳〵〳〵〳〵わいのふムヽそしてアノお前はマアどなたじやへどなたとは何ぞいのコレ私はお前の女房じやはいなヱヽアノお前がわしの女房かへコレハシタリ始めてお目にかゝりますアヽ嬉しや〳〵夫に付てもふしぎな事まさしくわしは谷へ落ち死だと思ふて何にも知らぬ其内に觀音樣がお出なされ前生の事細々と御しらせサイナア私もお前の後を追谷へ落たに違はないが身内に一つも疵付かず其上お前のお眼は明ホコリヤマア夢ではないかいなムヽそんなら今澤市〳〵とおつしやつたがコリヤ觀音樣が直々にお呼び生け下さいましたに違ひはないハヽハヽア有がたや忝けなや是より直にお禮參りは浮木の龜始めて拜む日の光りは年立かへる心地ぞや是ぞ誠に觀音の御利生有りけるや、見へぬ眼も見へ明らかに有がたかりける新玉の年立歸る如くにて水も洩さぬ夫婦の命も助かりけるは誠に目出度うさふらひけるけふは嬉しや杖を納めて折しも朝の日の目を拜んでお禮申すや神や佛萬見せ賜ふは是偏に觀音世これ偏に觀世音の誓の重きは岩を建水をたゝへて壷坂の庭のいさごも淨土なるらん御しめし有難かりける御法なり。

現代的

廣告は廣告社に限る

大阪市南區御藏跡町九

齋部德太郎經營

電話戎三七五六番

新口村の段

親孫右衛門　役毎日替　竹本相生太夫
忠兵衛　竹本南部太夫
梅川　（豊竹富太夫　豊竹綾太夫）
忠三女房　豊竹千駒太夫
捕手小頭　竹本長子太夫　野澤吉彌

人形

親孫右衛門　吉田玉次郎
捕手小頭　吉田市松
鶴掛藤兵衛　吉田傳之助
置頭巾傳ばい　吉田玉七
樋口水右衛門　桐竹紋太郎
忠三女房　桐竹政龜　吉田瓢壽呂
傾城梅川　桐竹紋十郎
忠兵衛　吉田扇太郎
亀屋忠兵衛

切

戀飛脚大和往來

新口村の段

近松巢林子の『冥途の飛脚』を菅專助、若竹笛躬が改作したのがこの『戀飛脚大和往來』で初演は安永二年十二月で堀江豐竹座。浪華淡路町の飛脚屋渡世の亀屋忠兵衛はふとしたことから新町の遊女槌屋の梅川に馴染み忠兵衛はぞっこん梅川に打込んで金に窮した揚句さる大名の廻送金の封印切をした態で大罪人となつたので梅川と手に手を取つて駈落し新口村の孫右衛門に暇乞をし死場所を求めに行くといふのがこの段で御座ゐます。

（床本）新口村の段

詞節季候だい〳〵、だい〳〵は節季候、おめでたいは節季候。通らしやれ〳〵。親方衆と違ふて、こちとらは水呑百姓、こなた衆にやる米はないわいのと。つことに云はれ、詞こりやひどい、如何樣貰ふ節季候より内の樣子はせく候と、去ぬれば女房は糸ぐるま、正月迄は休まうと、納戸へ取込みおうへの塵、掃出す表へ詞てい古手買紙屑、お内儀樣紙屑はないかな、オーいやな人ぢやわいの京や大阪と違ふて、在所に紙屑はない物ぢや、勝手しらぬ人ぢやそうな町へ出て買わつしやれ、阿呆な人と笑はれて、つぶやきながら見過し、〳〵、歸る程なく同行二人、ぶだらくや岸打波は三熊野の、那智のおやまの詮議とは、人目にそれと白木綿禪衣かけて順禮姿、お嬶樣、火を一

つ借つしやりませ、處は何といふ所かな。
爰は大和の新口村、煙草の火は出しませぬ
手の内も法度でござんす、アゝけんどな在
所だなと、家内をきよろ〳〵れめ廻し、次
の村へと出て行く、詞ほんに今日程うさん
らしい者のたんとくる日はない、納戸這入
りも成るまい、ドリヤ夕飯のこしらへと、
竈の前に差かゝる。落人の爲かや今は冬か
れて、すゝき尾花はなけれ共、世を忍ぶ身
の後や前、人目を包む頬かぶり、隱せど色
香梅川が、馴ぬ旅路を忠兵衛が、痛はる身
さへ雪風に、凍える手先懐に、あたゝめ
られつ温めつ、石原道を足曳の、大和は爰
ぞ古郷の、新口村に着きけるが、詞コレ爰
は、わしが生の在所、四五丁行けば實の親
孫右衛門殿の所なれど、不通といひ繼母な
り、殊に今の身の上を、お目にかけるは大
きな不孝、此わらぶきは忠三郎といふて、
親達の家來も同然、マア〳〵爰へと門の口
詞忠三郎殿内にか、アゝ久しう逢ませぬと
つゝと這入れば女房は、詞アゝこちのは今
庄屋殿へ、どこからござんして何の用、わ
しや藪際の次郎兵衛後家の媒酌で、近い頃
爰へ來た故、前方の近付は知りませぬが、
もし大阪の衆ぢやないかいな、こちの親方
孫右衛門樣の息子殿、大阪へ養子に行つて
けいせいとやらいふ物を澤山買ふて、人の
金を盜み、其の傾城を手にさげて、走つた
とやらすべつたとやらで、代官所からきつ
い詮議、孫右衛門樣は久離切つて、お上の
構ひなければども、血を分けた親子なれば、
いとしや年寄つてきつい案じ、こちの人も
馴染故、もしこのあたりうろたへて、見付
けられはさしやれぬかと、いかい氣苦勞、
庄屋殿から呼にには來る、ヤ寄合ぢや印判ぢ
やと、節季師走に爰らあたりは、傾せい事

九月の中座は
東京大歌舞伎

・九月二日初日・
毎日午後四時開幕

一の谷嫩軍記　二幕
双面水照月　常磐津連中
河竹默阿彌作
極附幡隨長兵衛　三幕

吉右衛門
友右衛門
宗十郎
其他
花形揃

でにえかへる、アヽうたての傾せいやとしられだ遠慮もなかりけり。二人はハツと駒に釘、打點頭て成程々々、詞大阪でも其の評判、わしらは女夫づれで、年籠の參宮、懐かしさに寄ましたが、立ながらあふて行にたい、大阪者と云はずに、ちよつと呼んで來て下されぬか。オヽ夫は安い事、一かへり行つてきませうが、京のお寺が鎌田村の道場へお下り、先からすぐに參られたもしれまい、夫ではよつぽどわしが戻りも遲い、コレ女中樣、飯がしかけて有る程に、出來損なはぬ樣に、差くべて下さんせやと襷外して出て行く。後は門口はたとしめ、繫金かけてうつとりと、暫し詞もなかりしが、詞コレ忠兵衛樣、ほんに爰は劍の中、斯うして居ても大事ないかへ。アヽ、いや〳〵、男氣な忠三郎、賴んで今夜は爰に泊り、死ぬる共故鄕の土、生の母の墓所、いつしよにうづまれそなたにも、嫁姑と引合せ、未來の對面さしたいと、おろ〳〵涙梅川も、それは嬉しうござんせう。去ながら、私がとゝ樣かゝ樣は、京の六條珠數屋町、定めて此間詮議に合ふて居さんせう、かゝ樣は眩暈持、若もの事は有るまいかと我身のうへより案ぜられ、今一度京の兩親に、一目あふて死たうござんす。詞オヽ道理ぢや〳〵、わしもそなたの親達に、聟ぢやといふて逢もしたし、恩の有る養子親、妙閉樣や言號の、おすはへも不埒の詫、そなたの兄忠兵衛殿の、志も無にした斷り今一度しみ〴〵あひたいと、人目なければなきじやくる。わたしもたんと恩の有る、兄さんが猶戀しいと、互ひに手を取り抱き合ひ、涙のあられはら〳〵と、袖にあまつて窓を打つ、詞ハア雪が降さうなと、奥の一間は西受の、反古障子を細目に明け、見

九月の浪花座へ
進出初お目見得の
更新家庭劇
ユーモアとイツトを放散する
今月の明るいおしばい・・・
九月一日初日・
浪花座
・毎日晝夜二回開演
・正午と五時卅分

ゆる野風の島道。うしろしぶきの雪吹にはかたけて急ぐ阿彌陀傘、道場參りぞつゝきける、詞ヤレありや皆在所の知つた衆、先なほ樋の口の水右衛門、ひどい呑人ぢやぞい、其次は荷持瘤の傳が姿、こりや又村一番の茶飲ぢや、そこへ入來る置頭巾は大貧乏であつたが。年貢に詰つて娘を京の島原へ賣つて、よい客に請出され、金持の奥様に成つて、賀の陸で田も五丁、藏も二ケ所の俄分限、同じ女郎受出しても、わしはそなたの親達に、憂目をかけるが、口惜いわいの。エ～愚痴な、モシそんな事云て下さんすな〳〵、アノ親仁は弦かけの藤治兵衛八十八で一升の、飯を殘さぬ達者もの、今年はてうど錢百ぢや、其後に仔細らしい坊主は、鍼立の道庵、あいつが鍼で母者人を立殺した、思へば〳〵親の敵。アゝもうよいわいな、今腹たてゝの、何の役に立たぬ事。アゝアレ〳〵、あそこへ見えるが親父様、此世のわかれ御暇乞、せめて餘所乍らお顔なりと、拜まうと、はる〳〵と爰迄來た念願が叶ふたか、アゝ有がたい〳〵〳〵〳〵、あの親子の肩衣が、孫右衛門様かいな、ほんに親子は爭そはれぬ、目元から鼻筋から、お前はよう似た事わいな。詞サア夫程よう似た親と子が、詞さへも得かはさぬは、何とした身の因果、詞アゝお年も寄り足元も弱つて、是が今生のおいとま乞でございますと、手を合すれば梅川は、今がお顔の見初の見納め、詞私は嫁でございんする、夫婦は今をも知れぬ命、百年の御壽命すぎて後、未來で孝行いたしましよと口の内にて獨語、夫婦諸共手を合せ、兎かく涙にむせび居る。孫右衛門は老足の、休み〳〵門を過ぎ、野口の溝の薄氷、すべるを留る高足駄、鼻緒は切れて横樣に、どう

新秋九月の樂天地

今日も滿員明日も滿員の好人氣

田宮貞樂劇一派と

中西大蛇劇の合同出演

獵奇的ナンセンス劇をぜひに

と轉べば南無三と、忠兵衛もかけど出られぬ身、梅川あはて走り出で、抱起しつ裾絞り、詞申し〳〵〳〵、どこもいたみは致しませぬかへ、お年寄のあぶない事、お足も洗ひはな緒もすげて上ませう、マア〳〵こちへと手を引いて、内へ伴ひ揚り口、腰膝撫ていたはれば、孫右衛門は氣の毒さ、詞アヽ戴きます〳〵。どなたか知らぬが忝ない、お蔭で怪我も致しませなんだ、アヽ若い女中のおやさしい、年寄と思し召て、嫁子もならぬ御介抱、もう〳〵手を洗はしやつてくださりませ、幸ひ庭に藁は澤山、鼻緒はわしがすげますと、懷搜して取出す塵紙。ア申し、爰によい紙がござんす、小搓捻つて上ましよと、延べ紙引さん其手元不思議さうに打守り、詞此邊に見馴ぬ女中、マアこな樣は、此樣に、何誰なれば懇ろにして下さりますと、顏つれ〴〵と眺むれば、梅川いとゞ胸つぼらしく、詞ハイ私は旅の者、私の舅の親父樣、丁度お前の年配で、恰好も生寫し、外の人にする奉公とは、さら〳〵もつて存じませぬ、お年寄に舅御の、臥惱みのだきかゝへ、孝行は嫁の役、御用に立つて嬉しい物、詞嘸連合は飛立つ樣にござりましよ、其紙と此紙とかへて、私が申し請、連合の肌に付けさせて、爺御に似た親父樣の筐にさせたうござんすと、塵紙袖におし包む、涙にそれとはしられけり。詞の端に孫右衛門、扨はさうかと思愛の、盡ぬ涙を押隱し、詞フウこなたの舅に、此親父が似たといふこの孝行が、エ嬉しうござるが腹が立ちます、わしも年たけた伜めを、樣子有つて久離切り、大阪へ養子にやつたが、傾城といふ魔がさして、人の金を盜んだとやら、あげくに所を走つた噂、此大和は生國なれば、十七斬の飛脚

歐米映畫ニユープリントの封切實演とレヴユーの本城

映畫王城 松竹座 ・どうとんぼり・

今日の流行
明日の憧憬
あなたの松竹座をぜひ御覽下さい

屋仲間、お上からも隱し目付、或は順禮古手買、節季候に迄身をやつし、此在所は詮議最中、誰故なれば其傾城の嫁御故、近頃愚痴な事なれど、世のたとへにもいふ通り盜する子は憎うなうて、繩かける人が恨めしいとは此事、詞久離切つた親子なれば、よからうが惡からうが、構はぬ事とは思へ共、大阪へ養子に行つて、利發で器用で身をもつて、身代もよう仕上げた、あの樣な子を勘當した、親は大きな白痴者と、指差せられ笑はれたら、其嬉しさはどう有う。詞今にもつい捜し出され、繩かゝつて引るゝ時、孫右衛門は目水晶、よう勘當した出かしたと、譽られるのが悲しうござる、それを思へば一日も、早う往生をおすくひと拜願ふは今まゐる如來樣、御開山、コレマ佛に嘘がつかれうかと、どうとひれ伏しもだへ泣き、梅川も聲を上げ、忠兵衛は障子より、手先を出し伏拜み、身をもみ歎くぞ道理なる。猶も涙を押拭ひ、詞樣子聞いたか聞かぬかしらぬが、子を釣出さうとお上の計らひ、養ひ親の妙閑殿、一昨日牢に入れたげな。エヽと夫婦は氣もうろ〳〵、それでつく〳〵思ふには實の親を便にして、もしも忍んで來はせまいか、來たらば何ぼう不便でも、養子親への義理有れば、かくまふ事は扨置いて、親が繩かけ出さればならぬ、あゝどうぞ來てくれればよいが、爰らあたりをまごつきはせまいかと、四年以來逢もせず、なつかしい子の顔を、見ぬ樣に〳〵と、雜行ながら神たゝきも不便さから、アヽとはいふ物の、若死にするも人の一生、義理有る親を牢へ入れ、おめ〳〵と逃隱れば、末世末代不幸の惡名、所詮逃れぬ命なら、一日なりと妙閑殿を、早う牢から出すのが孝行、覺悟極めて名乘つて出い

新秋九月を彩る
潑溂の大舞臺

角座の新聲劇
新聲劇の角座

四年振りで新聲劇四人組が顔を合したるほか女優其他凡ては更新の氣溢るゝ今日の新劇團を…

九月一日初日
正午と五時半
晝夜二回開演

シタがそれもどうぞ、親の目にかゝらぬ所で繩にかゝつてくれ、エヽ現在血を分けた子に、早う死ねと教へるも浮世の義理か是非もなや、何故前方に内證で、斯々した傾城に、斯うした譯で金が入ると、便宜でもしをつたら、久離切つても親子じや物、隱居の田地を賣立ても、首繩はかけまいに、皆あいつが心から、其の身もせまい苦をしをつて、いとしほなげに嫁御に迄、思ひも寄らぬ憂目を見せ、知音近附親に迄、隱れる樣に身を持ちなし、ろくな死もせぬ樣に、此親はうみ付けぬ、エヽ憎いやつぢやと思へども、かわゆうござると泣しづみ、わけたる血筋ぞ哀なる。涙の隙に巾着より金一包取出し、詞是は京の御本寺樣へ、上げやうと思ふた金なれど、嫁と思ふてやるではない、只今のお禮の爲め是を路銀にちつとなと、遠い所へ往て下されと、渡せば梅川押いたゞき、詞お心付いた此お金、逆樣乍ら戴きます、大阪を立退ても、私が姿目に立てば、借竹輿に日を送り、奈良の旅籠や三輪の茶屋、五日三日夜を明し、廿日餘りに四拾兩、つかい果して二分殘る、金故大事の忠兵衛樣、科人にしたも私から、嘸憎からうお腹も立うが因果づくと諦てお赦しなされて下さりませ、親子は一世の緣とやら、此世の別れにたつた一目、逢ふて進ぜて下さんせと、奥の障子を明けるを引留め、詞アヽコレ益体もない〳〵、たつた今もいふ通り、譬詞はかはさいでも、顏見合したりや繩かけるか、おれが口から訴人せにや、養ひ親への義理が立ぬ、何ぼ義理が立たい迚、親の手づからどう繩が、かけられうぞいの、御尤でござります〳〵そんなら顏を見ぬ樣にと、傍に有合手拭取り、泣々後に立迫り、慮外乍らとめんない

御期待の映畫がいつち見易い

辨天座

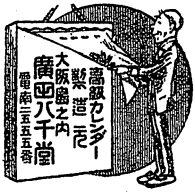
朝日座の引越興行

松竹キネマ最新版の封切場

千鳥、御不自由にはあらうが斯うさへすれば、餞にござつても構はあるまい。オヽオ添うござる 添うござる、物云はずと顔見ずと、手先へなと障つたら、そちが本望逢た心、親子一世の暇乞、必ずこなたの連合に、物いはして下さるなと、悦ぶ中に忠兵衛は、嬉しさ餘り馳出でゝ、互に手と手を取かはせど、互に親共我子共、云はずいはれぬ世の義理は、涙湧出る水上、身を浮く計りに泣かこつ、折から聞ゆる多くの人音、二人を奥へとつきやり〳〵、詞コレ〳〵女中、あの物音は慥に捕人、此裏道の小河を渡り藪をぬければ御所街道早う〳〵と氣をもむ所へ、順禮すがたの八右衛門、利平もともに蚤取眼、役人大勢打つれ立ち詞の内がきぶさいなと、どか〳〵〳〵と込入る所へ、組子一人かけ來り、詞所は長谷の山つゞきに、梅川忠兵衛と名乘る者、休みおつたを追つ取まき、からめとらんといたせ共、中々手に合ひ申さずと、聞くより小頭扨こそ〳〵、來たれ續けと引かへせば二人も倶に飛んで行く。孫右衛門は飛び立つ嬉しさ、天の助けかたじけないと、裏道見やつて延あがり、詞オヽさうぢや〳〵其道ぢや、ソレ其藪をくゞるなら、切株で足つくなと、届かぬ聲も子を思ふ、平沙の善知鳥血のなみだ、永き親子の別れには、安かたならでやすき氣も、涙々の三重〓浮世なり。

各種印刷カレンダー

紙製品包装紙



・大阪・内之島・

廣田八千堂

電話南二五五五番

四ツ橋畔より

八月の文樂座

消息日誌

△八月一日

年中行事夏の興行の初日開場

△八月二日

大阪府大阪市聯合後援の夏季音樂教育講習會の會員連が講習時間を割いて態々憧れの人形淨瑠璃氣分に浸られた。

△八月四日

大阪中央放送局吉例の舞臺中繼で「卅三間堂棟由來」平太郎住家の段を全國へ放送した。舞臺は前を南部、吉彌、後を島、友造人形は紋十郎のお柳、政龜の平太郎玉七の藏人、玉幸の和田四郎で非常に好成績を擧げた。

△八月五日

第四師團長林閣下始め幕僚五十餘氏が打揃つて來座された陸軍大異動に伴ふ送別の宴を兼ねて趣味深い觀賞會で凡ては德永高級副官が斡旋の勞を執られた。深く感謝いたします。

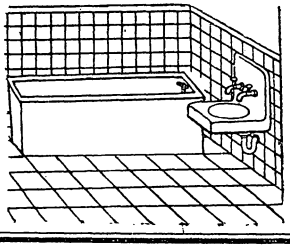
△八月五日

福井常務をめぐる文樂座後援會が盛大に來觀三百餘名でいとも賑やかでありました。

△八月十二日

文樂通で鳴らしてゐる司法省の川崎次官が武田儀一代議士の東道役で新裝後初の

化粧タイル
水道衛生工事
洗面、浴場、
水洗便所設計
汚水淨化裝置
特許無臭便所



西區立賣堀北通一丁目
新一橋
岡部商會
電話新町〔六六九 一二七六
阪急夙川
岡部商會支店
電話西宮 一九七六

文樂見物をされた。川崎次官と文樂とは深い因縁で東京への引越興行にはかゞさず見物されその郷土香に陶醉されてゐらるゝ。大阪人と淨瑠璃は離されぬものだから大阪人はこれが保全のために大いに見ればいかぬと熾んな文樂禮讃をして歸られた。

△八月七日

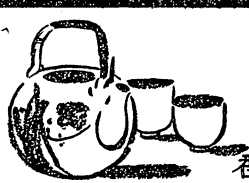
文樂と中等學生を結合さした府の島田督學課長が中學生のマチネーに就ていろ〳〵考究中であつたが教護聯盟幹事連の報告を得て來阪中の文部省督學官松井博士を伴つて「寺子屋」を見物された。松井博士は一段興味を惹かれたものと見えて切狂言まで見て歸られた程、急に文樂愛好者になられた。島田課長の大英斷で中學生の文樂マチネーが實現される日もさう遠くはないと思はれます。

△八月二十日

文樂の歷史に新らしい記錄を遺した夏の興行（今年から年中行事になつた）の八月興行も連日滿員で打上げました。若手連のために絕大の御聲援を賚はつた皆樣に厚く御禮申上ます。

（追記）二十一日から二十五日まで五日間夏の興行を京都南座へ引越して京都フアンを喜ばせました。

津太夫、古靱太夫、綴太夫等一行にて夏の東京劇場へ初出演して東京フアンを喜ばせました。


大阪御池橋
茶笠本
電話新町二六三二番

文樂座使用規定

一、當座御使用御希望者ハ當座備付ノ用紙各項ニ詳細御記載御申込下サイ

二、御使用責任者ハ當座御使用規定ヲ固ク御守リ下サル事ハ勿論、器具備品等ノ管理取締ノ責任ヲ御盡シ下サイ
若シ右ニ違反セラレタル時ハ故意ト過失ヲ問ハズ御使用前デモ御使用中デモ御使用ヲ取消シ致シマス

三、當座御使用料金ハ別表ノ通リデアリマス
長期間ニ渡ル御使用ハ特別ニ御相談申シマス

四、御使用料金ハ當座ガ御使用ヲ承諾シタル時直ニ御收メ下サイ、既納ノ御使用料ハ一切御返却致シマセヌ
但シ不可抗力ニヨリ當座ガ御使用ニ堪エナクナツタ時ハ全額御返却申シマス

五、御使用一週間前迄ニ御使用御取消又ハ御變更ヲ申出デラレシ時ハ半額御返却申シマス
御使用方法ニヨリ當座ガ必要ト認メシ時ハ御使用者ノ費用デ必ズ其ノ設備ヲシテ戴キマス之ノ設備ヲ怠ラレシ時ハ御使用ヲ取消シマス

六、御使用者ノ御希望デ當座ノ承認シタル場合ハ御使用者ノ費用デ特別ノ設備モ出來マス

七、五、六項共ニ御使用濟ノ場合ハ直ニ之ヲ撤去シテ戴キマス、之ヲ怠ラレシ場合ハ當座ニテ之ヲ施行シ費用ハ御使用者カラ申受ケマス

八、御使用中建物又ハ附屬品ヲ毀損或ハ減失サレシ時ハ當座ノ定メル損害額ヲ御使用者カラ辨償シテ戴キマス

九、御使用者ハ當座從業員ノ職務上ノ入室ヲ拒マレル事ハ出來マセン

十、當座從業員ニ於テ認メタル人數以上ノ御入場ハ御斷リ申シマス
既發行ノ入場券ニシテ使用不可能ノ場合ハ御使用者ニ於テ御責任ヲ負ハレ當座ハ一切其ノ責ニ任ゼマセヌ

十一、臺本檢閲並ニ興行願ハ一切御使用者側ニテ御取配下サイ

文樂座使用料　（一日）

時間／場所	收容人員	晝（自正午至午後五時）		夜（自午後六時至同十一時）	晝夜（自正午至午後十時）
文樂座	約850人	平日	80圓	100圓	160圓
		土曜	80圓	110圓	170圓
		日曜祭	90圓	110圓	180圓

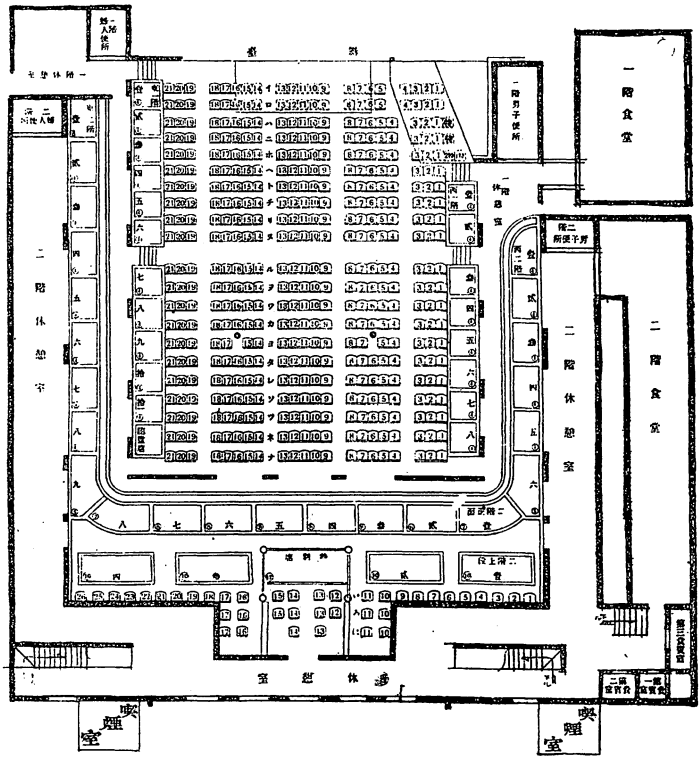
◇上記時間ハ季節ニヨリ多少ノ伸縮ヲ致シマス

◇割引——ソノ集會ノ性質ニヨリ割引スルコトガアリマス

器具御使用料

器具	備考	數量	料金
舞臺照明電氣料	晝夜普通燈ノミ	1回	15圓
同	同　普通燈ノミナラザルトキ	1回	20圓
所作舞臺	晝　夜	1回	10圓
活動寫眞設備	晝又夜映寫設備電氣技師共	1回	50圓
同	晝夜通シ	1回	70圓
アプライトピアノ	晝　夜	1回	20圓
音樂譜面臺	晝　夜	1臺	10錢
アークスポット	晝夜4・5 KW	1臺	10圓
スポット	同　大（1000W）　小（500W）	1臺	5圓
サイド・ライト	500W 1000W	1臺	5圓
シーリングスポット	100W　500W	1臺	3圓
サスペンションライト	100W　500W	1臺	2圓
フットライト	20W　100W　7球	1本	1圓
ゼラチンペーパー		1枚1回	1圓
大衝立	晝　夜	1對	5圓
演壇設備	同	1回	2圓
其他	必要ニ應ジ實費		
受付2名、案內10名、電話係2名、下足2名	1日1人　1圓宛		16圓
冷風裝置使用料			無料
暖風ラヂエータ使用料			無料

文樂座御席場案内



御覽料の外一切御不要の上大部分椅子席になつて居りますからお一人でも御愉快に洋服でもお樂に御見物が出來、またお出入が御自由です。

前賣切符壹等お座席・壹等椅子席のお切符は五日前から發賣致します、また五日以後のお切符も右席に限り御豫約申し上げますから上圖の座席表に依つてお早く御望みの御場席をお申し込みになればお心のまゝにお好きな處が御自由にとれます御用命の節お呼出しの電話は

南四七一一番で御座ゐます

切符賣場右指定席切符は當日前賣とも正面西側本家入口にて發賣して居ります。

二等席・三等席切符は當日正面入口にて發賣致します。

尙多人數樣お團体樣のお申込も御相談いたします。

爽やかな新秋のお料理とお飲物

文樂座食堂御案内

南直一營

洋食堂（西舘階上）

スピード・ディナー（御定食）	一、五〇
スープ	一、四〇
フライ（海老、魚）	時價
オムレツ	四〇
コロッケー	四〇
ビーフカツレツ	四〇
チキンカツレツ	四〇
ビーフステーキ（五分間）	五五
カレーライス	三五
チキンライス	四〇
コールドチキン	五五
コールドハム	五五
コールドビーフ	四〇
マカロニーチース	四〇
アスパラガス	四〇
サンドウイッチ	四〇
ソーダ水（特製）	二〇
交樂スペッシアル	
ビーフステーキ	一、〇〇

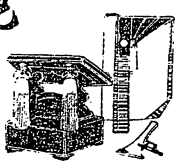
和食堂（西舘階下）

吸付辨當	一、〇〇
御食事、五品御飯香物）	二、〇〇
親子丼	、五〇
にぎり壽司	、五〇
ちらし壽司	、五〇
雀壽司	、五〇
鐵火卷	、五〇
赤だし	、三五
お吸物	、二五
菊正宗	、三五
特アサヒビール	、五〇
ダイヤレモンソーダ水（普通）	、三〇
冷コーヒー	一、五五
紅茶	一、〇〇
アイスクリーム	二、〇〇

酒場（西舘階上）

交樂カクテル	七〇
マンハツタンカクテル	六〇
ドライマテニイ	六〇
アブサンフラツペ	一、〇〇
ミリオンダラー	九〇
ミリオネア	七〇
ウイスキー	各種
コニヤツク	各種
リキユール	各種
チーズ	各種
ソーダビスケツト	二〇

儀太夫清潔醸本位
見られる病院 伊勢屋 其他 清酒 名産 奥道
加島屋 酒類 醸造



電話船場一八六二番
大阪市東區唐物町四丁目御堂筋西へ入

◇文樂座御ひゐき名簿募集◇

一、申込は必ず官製はがきの事。

一、葉書には兩面ともに御住所御芳名を御明記下さい（御往所御芳名の他一切不要）

一、御ひゐき名簿作製の上御芳名に隨つて種々の計劃の御通報を申上げ、且つ御優待方法を講じます。

一、會費其他一切申受けません。

一、宛名は大阪市西區四ツ橋　文樂座編輯部宛の事。

文樂座のわかる唯

「文樂今昔譚」　特價　金貳圓

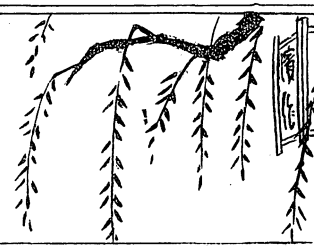
美しいグラフと興味ある好讀物月刊雜誌

道頓堀　一部　金三十錢

美しい原色版敷度刷床しい文樂座の包裝

文樂の繪葉書　二枚一組　金十五錢

なつおはり歸おの座樂文
上召お盡一で前板の作濱
番二六四二町新話電。をり



お食事は

西側別館の階上、階下に大食堂と喫茶室酒場が御座います。階上は洋食とバー。階下は和食本位の食堂、食事時間は混み合ひますから一幕前に豫約を願ひますとお仕度を整へてお待して居ります。

賣店は

一階と二階の東側休憩所に御座います。お菓子、番附、雜誌、お煙草その他幕間のお慰みの品々を取揃えて御座います。

お化粧とお手洗

殿方は西側の一階と二階に、御婦人は東側の一階と二階に御座います。廊下及び場内御散策の際は二階西側休憩所前にお化粧室が御座います。

お煙草は

一階二階廊下に喫煙室を備へてありますからお煙草はぜひ此處でお願ひ致します御座席では御遠慮下さい。

御携帶品は

正面一階に御預り所が御座いますからお持ちものはなるべく御預り所へお預け下さい。お帽子は椅子の下に設備がありますからそれへお願ひいたします。御歸りは混雜いたしますから成るべく終演一幕前に御受取を願ひます。

お出口は

お下足札赤札は正面西本家入口でお渡し致します。黑札は正面入口東側でお渡し致します。

貴重品は

各位にお持ち下さい、お場席お立ちのときは御携帶願ひます。

お場席券は

各自に御持ち下さいまし、切符に一枚づゝ番號が附いて居りますからお場席の番號をお忘れないやうにお願ひいたします

案内人へ

御祝儀お心附は堅くお辭退申上げます。不行屆の點は事務室まで御注意の程お願ひいたします。

幕間中は

案内人がお茶を差し上げますから御休憩所で御自由にお飲み下さい。

場内にて

蒸しタオルの準備が御座ゐますから御自由に御使用下さい。

出演者

寫眞撮影は絶對にお斷りいたします。病氣其他の事故にて出場不可能の場合は乍勝手代役にて相勤めますから、豫め御諒承願ひます。

當座御使用の

場合は事務室へお申込下さい『文樂座使用規定』を差上げて御相談をお受けいたします。各種催物、御集會其他社交場として御使用には最善の御便宜を計ります

お電話は

正面西側本家茶屋階段下に御座います。

自働車の御用は

文樂座指定の均タクが新車を揃えて玄關にお待してゐます。

露臺にも

爽やかな休憩所が御座ゐます

四ツ橋 文樂座
前賣切符專用電話南四七一一番
電話南 七四〇八番 三七八八番

豊田書房
(3261) 1589

昭和五年八月廿日印刷
昭和五年九月一日發行
大阪・四ツ橋・文樂座
編輯兼發行人 大塚良三
大阪市西區土佐堀通一丁目
印刷者 永井太三郎
大阪市西區土佐堀通一丁目
印刷所 永井日英堂印刷所

爽やかな新秋にふさはしき

文樂座の御宴會

・新秋特別興行にかぎり・

(B) 金參圓五拾錢 (御一人樣)
一階椅子席で御觀覽をねがひ
お食事は快美な『ランチ』
お揃ひの記念寫眞を、お一人宛へ

(A) 金四圓五拾錢 (御一人樣)
一階椅子席で御觀覽をねがひ
お食事は皆樣本位の御定食
(和食洋食兩樣の設備が御座ゐます)
お揃ひの記念寫眞を、お一人宛へ

□お申込は二十人樣以上を受付申上ます。
□記念撮影のお寫眞は終演と同時にお持歸り出來るやういたしております。
□お申込はお場席其他の準備の都合上五日前にお願いたします
□お申込は四ツ橋文樂座事務室へお願ひします。
□お電話の御用は前賣專用南四七一一・三七八八・七四〇八番へ

皆は方いし美で品上

粉白ブラク

純無良鉛

最良の石鹸

カテイ石鹸